五十年の彼方

麦（穀物P）

目次

序章　年下の姉貴分、年上の妹分……6
第二章　未来からの来訪者……10
第三章　七日間の恋路……36
第四章　告白、再会の約束……70
第五章　彼方への航路……82
第六章　五十年目の再会……94
終章　五十年の彼方……108

登場人物

主人公

メジロアサマ

一九七一年（昭和四十六年）時点でトレセン学園高等部一年。

来訪者

ゴールドシップ

未来から来た。学年・年齢不詳。

序章　年下の姉貴分、年上の妹分

「ようアサマ姉さん。元気か？」
「ああ。だが前より多少疲れやすくなったな。そちらはどうだ？　……いろいろあったと風の便りで聞いてはいるが、見た目は元気そうで何よりだ」
「心配させてすまねえ。またぼちぼち出直すさ」

二〇二一年十二月、我が家に約一年ぶりにゴールドシップが来た。
飄々とした、長身で芦毛のウマ娘。私との歳の差は五十歳ほどある。もし何も知らない人が私に対する彼女の振る舞いを見たら、彼女を私から引き剥がして叱りつけるか、その後に起こる事態を予期して退避するかのどちらかを選ぶだろう。

でも、その必要はない。私が許すからだ。
彼女とは、かつてはもっと近しい歳の差だった。何なら私のほうが若かった。彼女は出会った時から私のことを『姉さん』と呼ぶが、むしろ当初は彼女の方こそ『姉』と呼ぶにふさわしい歳だった。
「アタシも年を取ったら、姉さんみたいに動きが遅くなったりするんかなー」
「いや。貴様は百歳になってもバク宙を決めて高笑いしていそうだ」
他の人が聞いたらギョッとするような相手への呼びかけは、今も彼女相手にしかしていない。
「そうだとおもしれえな！」
「ふふっ、期待しておこう。ところで――」
定例とも言うべき問いかけをした。
「最初に発破をかけてからもう一年は経つが、うちの孫娘達との関係に進展はあったか？」
途端に彼女が固まり、頬に朱が差して、少ししてあたふたし始めた。

「それはだな、えーっと……」
「ないんだな？　このヘタレめ。前も言っただろう。貴様が告白したら両方とも即座に応じるのは確実だ。据え膳食わぬは女の恥だぞ？」
「格言を勝手に変えないでくれよ……。というか『孫娘達』って、二人同時に付き合うこと前提かよ」
「いかにも。あの二人ならばよしとするだろう。いつ告白する？　できませんでは良心がない」
「必ずや――、って約束できねえよ流石（さすが）に。今日の姉さんはいつも以上に押しが強いな」
「クリスマス前だからだ。次こそ良い報告が聞けることを期待している。努力しなさい」
「うえーい……」

その後もしばらく談笑して、彼女は帰っていった。東京からここまではなかなか遠いし、私の方が未だに多忙なせいでスケジュールを空けることもなかなか難しい。とはいえ、彼女から連絡が来たら万難を排して時間を取っている。
何だかんだで、初恋の相手と喋るのは今でも楽しいから。

遥か五十年も昔の話、私がまだトレセン学園の学生で、それでいて彼女がさっきと全く同じ見た目、私よりやや年上だった頃を思い出した――。

第二章　未来からの来訪者

1　三十一戦目の栄光の盾

レースの世界に身を投じてから二年、私はずっと独りだった。

近現代日本におけるウマ娘競走の始まりは、単なる体力測定競技会のようなものだった。社会のあらゆるところで、その力強さ、速さなどを活かして働くウマ娘が、全国から集まって日本一を決めたら面白そうだ、そういう軽さだったのかもしれない。元々各地の

神事や祭典で行われていた奉納競走をもとにして競技会が開かれたという。

しかし、後にこの競技会は戦に徴用するための選抜にも使われた。重く、苦しく、哀しい時期を経て、平和な競技会が復活した。

その後、競技会は徐々に一大娯楽、多くの人の憧れ、さらに新しい言葉で言う「アイドルの世界」へと変化しつつあった。

そんな中を、私はただ独り、走ってきた。

一九六九年（昭和四十四年）五月二十五日、初出走から十二戦目となる大一番・日本ダービーは、私にとっては後にも先にもない総勢二十八名もの選手での競走となった。前日夜からの雨でバ場状態は不良まで悪化し、その中を全力を振り絞って走ったものの、一着から二秒六も遅れる十六着と惨敗した。この年のダービーは大荒れと言われ、一番人気の選手・タカツバキがスタート直後にこけてそのまま競走中止となったり、一着となった選手・ダイシンボルガードの指導を補助する補助教官が興奮のあまりコースに入ってしまったりと、ちょっとした事件もあった。

この競走を経て自身の力不足を痛感し、独りさらに努力した。その年の夏は北海道で月

に二回ほどレースに出て修練を積んだ。ただ、重賞ではなかなか勝てなかった。

翌年の三月、私がいたチームの補助教官が指導教官として独り立ちした時に、私はその教官――引退まで、そして実はそれ以降も世話になる彼のもとに移籍した。それからいろいろと調子が良くなってきた。春の安田記念で勝ち、ついに重賞初勝利を飾ることができた。

そして秋、今まで走ったことのない長距離戦・天皇賞（秋）に出た。先行策で二番手を進み、第二コーナーから一時先頭に立った。一旦少し後ろに下がったが第四コーナーからの鍔迫（つばぜ）り合いを制し、先頭で決勝線を駆け抜けることができた。初出走から三十一戦目、ついに秋の府中で栄光の盾を拝領した。

長距離戦は苦しいのではないかとの前評判を覆しての勝利だったためか、まわりに記者が多数集まり、ファンもそれを取り囲むほどに集まってくれた。私のサインを求めるファンがあまりにも多かったため、後日ファンとの交流行事の名目でサイン会が開かれたくらいだった。

それほど多くの人に関心を寄せてもらっていた自覚はあったとはいえ、内心では私は独りという心持ちはあまり変わらなかった。別に独りでもよかった。

三十二戦目、初めて年末の大一番・有馬記念に出て、二番人気の支持を受けるも五着だった。一着とはちょうど一秒の差、完敗だった。この時も数多くの記者から取材を受けたが、内容についてはあまり覚えていない。その時の報道も、まわりの噂話も、特に確かめることもなくそそくさと寮に帰り、寝た。

翌日、一か月ほど休養期間とする旨指導教官から連絡があったので、北海道の家族には年明けに帰ると告げ、東京で独り新年を迎えた。

2　第五種接近遭遇

一九七一年（昭和四十六年）の年明け、一月四日から学園はすでに活動を始めている。私は別にここに来る必要もなかったが、制服を着て登校していた。この時期に来る生徒は皆レースが近いので自分の活動に集中しており、先に栄誉を手にした存在を気にする者はいなかった。むしろ気にされない方がよかった。

学園に二年ほど前にできた広場と噴水の前を通りかかった。戦後にウマ娘の活躍先とし

てレース体系を復興させるために設立されたＵＲＡ・日本ウマ娘競走振興会の創立十五周年記念事業として整備されたものだった。装飾はかなり立派で、噴水の部分にはひときわ大きな像が建っている。ウマ娘の始祖とされる三女神（さんめがみ）の像で、最近はここに来ると三女神からの力を得られるとのことで、巡礼する生徒も増えつつあった。

寒空の下、その傍らに四人目の女神のようなウマ娘が佇（たたず）んでいた。噴水の縁に腰掛けた姿はこの世のものでないようで、どこか別の世界から迷い込んだかのような存在感を示していた。私は思わず目を奪われた。これほどまでに神々（こうごう）しい存在は未だかつて見たことがなかった。

しばらく呆けたように眺めていたが、思い出したかのように吹きつけてきた北風に意識を引き戻された。ここにいても凍えてしまう。暖かい食堂か図書室にでも行こう。その女神のような存在の前を通り過ぎて数歩、後ろに何かが動く雰囲気を感じた。

「ぐっもーにんマックちゃグボァ！」

突如その存在に飛びかかられたので、思わず反射的に右腕を全力で振るってしまった。

何かがつぶれるような呻き声が聞こえた。たとえ相手がウマ娘とて、私の全力を受けてしまっては大怪我は免れない。とんでもないことをしでかしたという後悔と、せめて早く助けなければ、との思いで動揺しつつ振り返ると、まるで何事もなかったかのようにその女神が埃を払って立ち上がっていた。

「なんだよアタシ渾身のお茶目な、……っ！」

こちらを見た女神の顔が恐怖に歪んだ。おそらく、私の表情がかなり険しくなっていたに違いなかった。今までも無意識にとってしまう表情のため、多くの相手を怖がらせてしまい、遠ざけられる一因となってきた。今すぐにでも表情をやわらかくして、敵意がないことを示さねば。まずは、先ほどの謎の振る舞いについて尋ねたい。そう思って言葉を紡いだ。

「私を突如襲うとはいかなる了見か？」

「え、あ、……」

相手の表情からまた失敗を重ねてしまったと悟った。言葉選びを致命的に間違えてしまったのは明らかだった。彼女も次の瞬間に私から遠ざかってしまうだろう。他者との交流がうまく行かないことへの、人生何度目かの諦めの境地を抱きつつその場を離れようと

したところ、思わぬ言葉を聞いた。

「……マックイーンじゃ、ない？」

彼女は別人の名前を呼んだ。その人物は私に似ているのかもしれない。もしかしたら、その人物を探す途中でこの噴水の所に座っていたのだろうか。

「人違いだな。私の名ではない」

返答をして、また少し後悔した。険があるどころではなく、冷酷な響きさえあると自分でも感じてしまった。とはいえ、彼女が探し求めているのは私ではない。すでに用事は済んだはずだ。踵（きびす）を返して去ろうとしたところに、さらに背後から声が投げかけられた。

「マックイーンを、メジロマックイーンを知らないか？」

知らない。私と同じメジロの名を持つウマ娘のようだが、そのような名のウマ娘は私の知る限り、親類縁者には全くいなかった。ここで、不思議とふつふつとどうしようもない憤りが沸き起こってきた。なぜ彼女は私を見て他の名前を呼ぶのか。誰もが知る栄冠を手にした私の名を知らないのか。

「家族にそのような名の者はおらぬ」

意図的に突き放した物言いをしたが後悔はしなかった。一体何だというのだ貴様は。私

を見ながらも私を見ていない女神。今までにない怒りのような感情に包まれた。
「……アンタの名前は」
ようやくの誰何の声。もう、答える気はなかった。とても虚仮にされた気分だった。
「無礼者に名乗る名など無い」
こちらに近付いてきた彼女を意図的に振り払った。もちろんその力に堪えうる者はなく、彼女も例にもれず倒れ伏し、動かなくなった。反射的な怒りは再び吹き付けた風によって冷却されて飛び去り、後悔だけが残った。
命に別状はないというのは私の長年の感覚で診断できたが、さりとてここに放置するわけにもいかない。感情の捌け口にしてしまったせめてもの罪滅ぼしにと、彼女を保健室に運んだ。初めは前に抱えたり、背負ったりしようと努力したもののうまく収まらず、最終的には俵担ぎのようにして運ぶことになった。
「失礼します」
「はいはい。あら、メジロアサマさん。……そちらの方は」
「噴水のそばで気を失って倒れていたので運んできました。息などは問題なさそうなの

で、しばらくしたら起きると思います」

「わかったわ。ありがとう」

なぜ彼女が気絶しているのか察したのか、深く尋ねられることはなかった。私を恐れることなく、他の人相手と同様に、平等な振る舞いをしてくれる養護教諭（ようごきょうゆ）に彼女を委ね、独り図書室へ向かった。

図書室では本を読んだはずだが、あまり記憶に残らなかった。今までになく心が動揺していた。自分があそこまで感情的になる、感情的になれるなど思いもしなかった。

夕食に良い頃合いとなったので食堂に移動し、正月三が日明けすぐから生徒教職員のために食事を供してくれる料理人の方々に感謝しつつ食事を摂った。小さなおせち料理風の献立で、お雑煮の温かさが身に沁みた。ようやく、気持ちが本当に安らぎを取り戻した。

もしあの彼女が目を覚まして私がしでかしたことを訴え出たら、私には謹慎処分が下されるか、あるいは司法の世話になるかもしれない。その時は当然受け入れねばならない。

食堂をあとにして、そのまま学園を出て寮への帰り道をたどる。外を歩く人はほとんどいない。皆、こたつにこもって丸くなっているのだろうか。

寮のそばまで来ると、何やら困り果てたような振る舞いをしているウマ娘がいた。その姿が少し動いて街灯に照らされ、誰であるか分かった。なぜ彼女がここにいる。歩み寄ると、あちらも私の存在に気付いた。

「メジロ、アサマ……」

今度は私の名前を正しく呼んだ。おそらく養護教諭から聞かされたか、どこかで調べてきたのだろう。しかし、名前を呼ばれた事よりも、そうするまで私の名前を全く知らなかったことが妙に癪に障った。また、怒りの感情が戻ってきた。

「出合い頭に人の名を呼び捨てにするとは、ずいぶん肝が太いと見える。二度目の無礼ともなれば、辞世の句の用意はしたのだろうな？」

つい調子づいて、今まで使ったこともないような敵意がありありと出た言葉を使ってしまったが、同時に、この程度では相手は怯むまいとも感じていた。果たして幸か不幸か、私の敵意は特に通じなかったようで、彼女はむしろ救世主が現れたとばかりに目を輝かせ、飛びつかんばかりの勢いで迫ってきた。

「頼む！　アタシをかくまってくれ！」

文字通り目と鼻の先に迫った彼女の、その美しさに、心が震えた。

何があったのかは分からない。ただ、このまま見捨てれば彼女は行き場を失うと直感が告げていた。気の迷いと言ったらそうかもしれない。少なくとも先ほど思い浮かんだ敵意とは裏腹に、無駄な言を弄して彼女を困らせようなどという気持ちは露ほども思い浮かばなかった。ゆえに答えはひとつだった。

「……良かろう。私も貴様にいろいろ聞きたいことができた」

3　芦毛の未来人、かく語りき

私の言葉に、彼女はかぶせるように返事をした。

「ホントか⁉」

「自分で頼んでおいて疑うとはなんだ。ついてこい。とはいえ目的地はすぐそこだ」

立っていた場所からわずかに数歩、目の前の寮――府中寮に招き入れた。玄関こそ明か

りが灯されているが、寮生の多くが親元に帰省しているため、部屋の多くはまだ暗いままで、少々不気味な感がある。もう何年もいると慣れてしまったが。

今日は寮長も、学園から派遣されている寮監も不在なので、特に手続もなく守衛室の前を素通りした。

「なんかボロっちい建物だな」

彼女はキョロキョロとあたりを見回しつつ、率直な感想をもらしていた。まさにその通りだった。

国に近い団体の宿舎や寮は古いまま放置されがちだが、ＵＲＡ関係についてはウマ娘のレースを一大興行として大きく売り出す計画が始動しており、優秀な選手を多数発掘するために大規模な寮を新築する計画がようやく具体化した。ウマ娘に縁のある史跡がある地名を採り、『栗東寮』と『美浦寮』と名付けられるらしい。この話題も学園にいるなら知らないわけがないはずだが、どうも彼女はその話すら認識していないようだった。

「ようやく新しい寮の建設が決まったところだ」

「そうなのか。いや、トレセンにこんなボロ寮があったなんてな」

「……貴様に聞くことがまたひとつ増えた」

彼女を引き連れて、二階の自室に行った。二人部屋だが、入寮以来一貫して同室の生徒はいない。寮監や寮長があえて私の部屋に相手を割り当てていないという噂や、私の名前や険しい雰囲気にに恐れをなして誰も同室になりたがらないなど、少々不本意な噂話もあったが、たとえ誰かと同室だったとしてもお互い居心地が悪くなりそうではあったので、むしろ都合が良かったのかもしれない。

部屋に着いてひとまず手近な座布団に座らせた。誰かが来ることを想定した調度を整えていなかったことを今更ながら後悔した。

「なんかお嬢様の居室らしくない質素な感じなんだが」

「私が『特別扱いするな』と望んだことだ」

やはり質素だと思うか。引越しの折にここを訪れた執事やメイド長がしきりに心配して諸々手配しようとしたが止めたことを思い出す。そして、『お嬢様』という単語が出てきたことから、彼女が私の素性(すじょう)を多少なりとも調べていることが窺(うかが)い知れた。

こうしていくつか言葉を交わしても、私のことをあまり知らないような雰囲気が未だ透けて見える。本当に異世界から突然来たのではないかと思える、不思議な奴だ。少し、尋ねてみたくなった。

「して……貴様は『どの世界から来た』？」
その言葉に、彼女はあからさまに動揺した。思いもよらぬ場面で核心を突かれたという表情を浮かべていた。あるいは困り果てた末にようやく頼れる神でも見つけたかのような感情も重なっているようだった。
「！　分かるのか？」
「私の身の回りには不思議なことが時折起こるものでな。貴様からはここではない別の世界から来たかのような違和感があった」
前半は出任せだった。身の回りに不思議なことが起きたのは今回が初めてだった。まあいい、嘘も方便という格言がある。それを言い訳にさせてもらおう。
「……アタシの話、聞いてくれるか？」
「話してみろ」
私が水を向けると、彼女は堰を切ったように話し始めた。

彼女の名はゴールドシップ。目が覚めたらあの噴水のところにいたという。しかも、私から見ると五十年後の世界から来てしまったらしい。いわゆる『未来人』という存在だっ

た。私に声をかけたのは、彼女が元の世界で親しくしている友人と見た目が非常によく似ていたからだという。私が追い払った、というか気絶させて保健室に運んだ後、彼女は養護教諭から私の名前を聞かされ、街の図書館で新聞を読んで、今日の日付と私の近況を知ったらしい。

夜になり、財布の中に未来の金しかなくて困り果てていたところ、私に出くわしたという。私の名が五十年後も続いている家である「メジロ」の名を冠していたので、もしや自分が知るメジロの先祖かと思って一か八かの談判に出て、ここに招かれた、と。

「ふむ。五十年後の世界から来た、と。いろいろと災難だったな」

その言葉に、彼女はほっとした表情を見せた。不安も多々あったことは想像に難くない。

「あやうく異世界で野垂れ死にしてしまうところだった」

「しかし、五十年後もメジロ家があるということは、私がこれから頑張らねばならないということでもあるな」

五十年後、私が生きているなら老人と言ってもよい年頃だろうか。私ではなく、メジロの名を継ぐ別の者が家を盛り立てている可能性もなくはない。ただ、いずれにせよ私に子

孫がいるかもしれない。思いを巡らせていると、再び不安そうな面持ちになったゴールドシップが声をかけてきた。

「こんな怪しいアタシが言うことをまるっと信じちゃっていいのかよ」

「人を騙そうという輩は自分から怪しい奴とは言わないものだ。話に時折出てくる単語が聞き慣れない珍奇な新語のようでもあるし、貴様の話は一定の妥当性がある」

真偽を判断するのは難しいが、もしここまで壮大な嘘を述べられるならば大した人間だと思うし、少なくとも彼女が困っていたのは確かだ。彼女の話が嘘だとして、それで騙されても実害はあるまい。たとえ小さくとも少々は名のある家の生まれ、困った人間を見捨てるようでは一人前と言えぬ。過去に読んだ小説――ＳＦだったか――を思い出して、その時に主人公を世話した街の科学者のような言葉を投げた。

「この世界に何日いることになるかは分からんのだろう？　仮の宿としてここを使うといい。向かいのベッドが空いている。服その他一切、学園生徒としての身分は家経由で用意させる」

ここまで一気にまくし立てて、やや勇み足だったかと今回何度目かの後悔をした。

普通に考えるならば、最初に手荒く拒絶した相手がいきなり宿を用意して諸々の待遇を

示したら何か裏があるのではないかと疑うか、あるいは急な心変わりに対して引き気味になるだろう。特に最後、確かに今のメジロの家ならばＵＲＡとの関係柄、多少は学園に話をつけやすいの本当だが、一般には胡散臭(うさんくさ)い言葉にしか聞こえない。

しかし彼女は大らかだったのか、それとも助けになりそうなものなら何でもすぐに取り入れるべきだと考えていたのか、私の言葉を特に疑うことなく話を続けた。

「ありがてえ。これで何とかなりそうだ。……ところで名前はどうしたらいいと思う？さすがにアタシの名前そのままはまずい気がするんだが」

「確かに『ゴールドシップ』の名乗りのままだと後世諸々の差し障りがあろう。別の名前にしよう。そうだな……ホシハタと名乗っておけ」

「ホシハタ？」

「なに、最近学んだウマ娘史で貴様そっくりの風貌(ふうぼう)の肖像画を見たものでな」

彼女の姿をどこで見たかを思い出した。ウマ族に関する歴史の教科書の一ページだった。まるでその神々しい姿そのままに本の中から抜け出してきたかのようなたたずまいだった。もしかしたら目の前の彼女は、そのホシハタの末裔(まつえい)かもしれない。過去の偉人の人物像を時々想像することがあるが、もし目の前の彼女のような存在だったら、ちょっと

面白いかもしれない。軽く笑みがもれた。
「いややっぱりゴー……いい、そのホシハタって名前にしとくわ」
何やら文句を言おうとしていた彼女が不意に沈黙し、言葉を撤回した。そんなに私の顔が怖かったのだろうか。でも、彼女は少しばかり頬を染めているように見えた。何か恥ずかしがるようなことはあったか？

彼女の仮の名乗りが決まったところで、改めて挨拶をした。
「今朝方は『無礼者に名乗る名は無い』と言ったが、しばらくともに過ごすならば名乗っておくとしよう。貴様はすでに誰かから名を聞かされたようだが。メジロアサマだ。よろしく頼む」
「しばらく世話になるぜ、アサマ姉（ねえ）さん」
普通に『ねえさん』と呼ばれたはずだが、何やら言外の意を感じたので一応尋ねた。
「『ねえさん』の発音に、舎弟が親分を呼ぶような成分が交じっているような気がしたが」
「気のせいっすアネゴ」
彼女はあからさまに目を逸らした。しらを切られたような、開き直られたような。しか

し特に気にすることでもなかった。
「……まあ良い。好きにしろ」
握手をして、契約は成立した。

それからほどなくして、彼女の腹が鳴った。
「……すまん。朝から何も食ってないんだ」
こちらの世界に来る前に食べていないとすれば、こちらに来てからは色々あったし、お金の持ち合わせもなかったはずなので何も食べられるはずもない。
「確かに、食べ物を調達する手段がないものな」
彼女に何か食べさせてやらねばならぬ。とはいえ寮の食堂は明日まで休みで、さらに私の部屋にはお菓子は少しあるものの、ご飯になりそうなものは置いていない。どうしたものか。少し考えて妙案を思いついた。
「まだ学園の食堂が開いているから行くぞ」
「生徒じゃないのにタダ飯食って大丈夫なのかよ」
「貴様はもう生徒だ。正確には明日の手続で転入したことになるが、『体験入学』は必要

だろう？」

「おおっ！　さすがっす姉さん！」

このような屁理屈を立てるなど生まれて初めてだった。自ら言うのも少々腹立たしく思えるが、今までが真面目一辺倒、石頭、無味乾燥の具現とまで陰で言われてきた。このような悪知恵を働かせる様子を見たら、学園の者がみな、それこそ陰口を叩いていた者も寄ってたかって私を病院に担ぎ込むかもしれない。とはいえこの時は、そのような悪知恵を本当に実行したくなるくらいには浮かれていた。

彼女が着ていた制服は今の制服とは少々違ってはいたものの、遠目に見たら分からない程度の違いだった。そのため、食堂では特に疑われることもなく彼女に食事が供された。

閉店間際ということもあったのか、通常の五人前くらいのおせち料理風の盛り合わせとお雑煮が現れた。私でも頑張って平らげられるか不安になる量ではあったが、彼女はそれをあっという間に平らげていた。

「いやー食った食った。これで新幹線ゴルシ様は博多まで五時間で走れるぜ！」

「……？　新幹線は新大阪までだぞ？　確かに博多までの工事はもう進んでいるらしいが」

突然新幹線と縁もゆかりも無い土地の名前が突然現れたので、一瞬戸惑った。東京からはるか千キロの彼方であるそこには、新幹線はまだ届いていない。私の返事に、彼女は目を丸くしていた。

「え？　新大阪までしかないの？」

「ない。やはり貴様は未来人か」

「そう言ってるだろー。でもギャップあり過ぎてさすがに頭がヘンになる」

あと数年もすれば開業すると言われているその新幹線が通じたら、彼女の言う通り、ここから五時間で九州の地にたどり着けるのだろう。この調子だと、彼女は今この時代のことをほとんど知らないとして差し支えないだろう。

「わかった。明日からいろいろ案内してやる」

「サンキュ！」

目の前に突然「未来人」が現れるという信じがたい事態ではあったが、若干楽しくなってきた。

4　初めてのルームメイト

寮に戻り、少し休憩してから風呂に入った。もちろんゴールドシップは着替えを持たないので適当に貸した。残念ながら背丈が違い過ぎるのでぴったり合うものはない。普通の服も含めて多少は買っておいた方がいいだろう。……おそらく下着も。

身体を洗い、二人揃って湯に浸かっている時にうっかり横を見たことを後悔した。普段は全く気にしていないことでも、目の前ではっきりと見せつけられると急に気になってしまい、どうしても自分の胸元と見比べてしまう。やり場のない怒りに襲われ、怒りの発散と言い訳をしつつ彼女の豊かな胸に向けて頭突きをした。

「ぐおっ！　いきなりボディーチェックか？　水球大会か？　いいぜ、全国タイトル獲(と)ってやるぜえっ！」

「やらん。百数えるまでそこから動くな。茹(ゆ)でダコになってしまえ」

「いきなりどうしたんだよ姉さん」

「……スタイルがいい奴を間近で見てしまった僻(ひが)みだよ。すまない、気にするな」
口にしつつ急に恥ずかしくなったので、彼女を置いて先に上がった。後ろの方で彼女が何やら水面に泡をぶくぶくとさせつつ何かを呟(つぶや)いていたが、よく聞こえなかった。

しばらくして上がってきた彼女とともに部屋に戻り、そこで重要なことに気づいた。
「さて、今気づいたが、そちらの空きベッドには布団が何もなかったな……」
「だな……」
二人部屋を一人で使用しているため、ベッドそのものは空いていた。とはいえ当然使わない側のベッドに布団を用意しているはずもない。敷物代わりになるような物もなかった。
「仕方ねえ、アタシは畳でゴロ寝するわ。カッチカチで身体が痛くなりそうだけどな。新聞紙にでもくるまれば寒さは大丈夫だ。昔体験したし」
災害にでも遭遇したのか、それとも一時帰るべき家を持たなかったのか、非常に気になる言ではあったが、深く突っ込んで聞くにはまだ早過ぎる。それはさておき。
「客人を粗末に扱っては人間がすたる。何より冷え込んだ中そこで寝ると風邪を引く。私

のベッドを使え。私は適当に寝る」
　ヒトよりも少々体温が高いらしいウマ娘の中でも、私はさらに高めの部類に入る。戸棚にしまい込んでいる半纏（はんてん）でも着て、大きめのタオルを一枚か二枚被（かぶ）って眠れば問題はあるまい。
「いやいやいや、お嬢様を畳に転がしたら後でアタシが抹殺される！　そっちこそ風邪引くぞ」
「気にするな。問題ない」
　さんざん押し問答をしたものの埒（らち）が明かないので、保留していた妥協案を提示した。
「では……一緒に寝るか？」
「……まあ、試す価値はあるな……」
　狭いベッドに長身の彼女が入れば、たとえ一方がちんちくりんの私であっても窮屈（きゅうくつ）だった。いろいろ試した結果、私の背中の側に彼女が同じ方向を向いて寝て、さながら私を包み込むようにするのが一番収まりがいいとの結果が得られた。
「いい感じに収まったな、姉さん」
「そうだな」

「この体勢だと姉さんを抱き枕にできそうだ。いや、湯たんぽか」
「だっ!?　いや湯たんぽ!?　あ、おい待て！」
文句を言う暇もなく背後から抱きしめられた。柔らかさと温かさに心臓が跳ねた。このようなことをしたりされたりする相手は過去になかった。
なぜか、大変な緊張とともにいつもと違う安らぎも感じ、いつの間にか眠りに落ちていた。

第三章　七日間の恋路

1　自覚

翌朝、何かが落ちるような音で目が覚めた。
「……何事だ？」
「それはこっちのセリフだぜ姉さん……」
身体を起こして横を見ると、ゴールドシップがひっくり返っていた。

「寝言で野球の応援を始めて、振り上げた拳が見事アタシにクリーンヒット、特大場外ホームランでベッドの外に吹っ飛ばされたってワケ」

「まことに申し訳ない……」

頭にできたたんこぶをさする彼女を前にして深々と頭を下げて謝罪した。頭を下げた後、姿勢を戻すのに少々躊躇した。私が吹き飛ばしてしまったためか、もともと体型に合っていない寝間着がはだけてしまっていて、見ている方が逆に恥ずかしくなってくるからだった。目をそらし気味にしていると、私の視線の方向に気付いたのか、彼女は少しいたずらっぽい笑みを見せて軽く挑発してきた。

「今ならタダ見サービス中だぜ？」

「〜〜〜〜〜ッ！　朝食とその他諸々の用事を済ませたらすぐに服を買いに行くぞ！」

「ほいほ〜い」

学園に向かうために二人とも制服に着替えたが、ここでも少々一悶着があった。

「アタシに合うブラ持ってないか？」

「喧嘩を売っているのか貴様は。あるわけないだろう。私を見ればわかるはずだ……」

「お、おう……」

「どうせ私はぺたんこだよ……」
彼女は何の気なしに尋ねたことは明白だったが、昨日の姿と今目の前、視界の端に見えている姿に、またもや劣等感を持ってしまった。
「まあ大丈夫だって。そっちが好きな奴も多いもんだからさ」
「……潰す」
宣言通り潰した。彼女の胸を。サラシをガチガチに縛り上げるようにこれでもかと巻いて潰した。これで当初の目的は達せられた。苦しそうに目を回していたが知るか。
「ぐるじい……」
……さすがに可哀想になったので、心持ち緩めに巻き直した。

寮の電話で実家に連絡し、昨夜の顛末を話した上で彼女の学籍手配を頼んだ。とはいえ『未来人を拾ったから編入学させろ』と言ってしまっては本当に病院に担ぎ込まれかねないので、トレセン間短期交流事業の制度を使えるよう話を合わせた。
急な話で、本来のトレセン間交流の手続きと比べればはるかにショートカットした、いわゆるコネを使うような物だったがすぐに引き受けてくれた。電話を受けた執事も喜び、

話によれば両親も喜んでいたらしい。やはり、私がほとんど発することがない『友人』の単語が効いたのかもしれない。

寮から少し歩いて学園の門をくぐり、昨夜も世話になった学園食堂で朝食を摂った。今日は珍しく洋食だった。

「この古くさいザ・お役所の食堂がアタシの時代にはおしゃれなカフェテリアになってるんだぜ」

「それはいいな。やはり食事をする場所が綺麗だと士気が上がる」

「他の建物もわりとボロボロな感じだけども、これから超綺麗になるから期待していいと思うぞ？」

学舎が綺麗に改修されたり、建て直されたりするのはとても嬉しく思う。少し残念なのは、それらが実現するのは、諸々の手続きと工期を考えると私が確実に卒業してしまった後だということだった。

「私はあと二、三年で引退してちょうど卒業になりそうだから、むしろ『超綺麗にする』方だろうな。しかし聞き慣れない言葉の使い方だな。意味合い的には『とても綺麗になる』だと察しはつくが」

「似た感じの歳なのに時代のギャップを感じる……これがおばさ――」
「とてもむかつく単語が聞こえかけた気がするな。サラシをもう一回きつく巻き直して胸の厚さをマイナスにしてやってもいいんだぞ？」
手を構えつつ睨(にら)みつけると、彼女は一瞬で引き下がって両手を上げた。
「勘弁してくれよ。緩くされたってまだかなりきついんだよコレ……。そういえば『むかつく』はアタシの時代と同じ感じの意味合いで使うんだな」
「ああ。単語の使い方は流行り廃(すた)りがあるものだが、多少は貴様の時代にそのまま通じる言葉があって何よりだ」

朝食の後は事務室へ行き、ゴールドシップの短期交流手続に関する連絡が私の家から届いていることを確認した。書類はまだだが、今日夕方には正式な交流生徒として登録されるだろう。
事務室を出た我々と途中ですれ違った理事長秘書の姿を見て、ゴールドシップが急に震え始めた。
「どうした？」

「さっきすれ違った人なんだが、……理事長秘書だよな？」
「そうだが」
「名前は『駿川（はやかわ）たづな』で合ってるか？」
「いや。名字は『駿川』だが、名前はそうではない。何だったかな」
そう返事をしたところ、あからさまに安堵（あんど）の表情を見せていた。
「あー、いや、五十年後の理事長秘書ととてもそっくりでな。もしたづなっち本人だったら妖怪説が出現してしまうところだったぜ」
「貴様が知るのはおそらくは彼女の子孫なのだろう」
「だよな」
学園での用事は一通り済んだが、まだ朝早いので街の店は開いていない。しばらく時間があるので、ひとまず学園内を案内することにした。彼女の時代とこの時代だと、違うところもたくさんあるに違いない。
まずは座学を行う教室棟、その次に体育館とトレーニング室等を案内した。その途中で、工事が始まったばかりの一角を通り過ぎた。
「えーっと、『ダンスレッスン室』とな？」

「そこか。何やら最近工事を始めたらしいが」
「姉さんに吹っ飛ばされてから再会するまでの間に街の図書館で新聞を読んだんだ。そこに小さくレースに連動したライブをやる提案とかなんとか書いてあったな」
「レースとライブが連動、か。何だか良く分からんな。ただ、工事を始めているということは、おそらく中では話が全部決まっているのだろう」
トレセン学園の新時代があちこちで始まっているらしかった。

校舎群を見て回った後のゴールドシップの評価は端的で、辛辣だった。
「うん、なんか全体的にボロいな！」
各地を通りかかるたびに『ボロい』『古い』『壊れている』の単語が連呼された挙げ句これであった。
「そこまで何度も言われると、自分のことではないがなぜか傷つくぞ……」
彼女曰く、これから五十年のうちにあらゆるところが綺麗に建て替えられたり、再整備されたりするらしい。
しばらく歩いてかつて畑だった荒れ地まで来ると、ここでも彼女は残念がっていた。

「ここもすっかり荒れてんなー」
「戦後しばらくはにんじん畑だったらしいんだが、手入れをする人がいなくなって単なる草むらになってしまっている」
「てことは、あのちんちくりん理事長が来るまで畑はこのままか」
「ちんちくりん？」
学園を預かる最上席の職員に対する形容詞としては不可思議な、むしろ不敬とも思われる表現だった。
「次かその次の理事長は超元気なちびっこになる。なんでもすぐにポケットマネーでやろうとして、さっきの秘書そっくりの理事長秘書に毎回怒られてる」
「そのように幼い者が学園を預かるとは、本当に未来は大丈夫なのか？」
「やよいちゃんはしっかりしてるぞ？　生徒のことをしっかり見てるし、ここの畑を綺麗にするし、最近は野菜を育てて料理をする祭りも始めたな」
彼女の語りを聞いて分かった。その未来の理事長は多くの生徒から慕（した）われる存在なのだと。
「良き人が来るのだな。後半の方を聞くと学園の活動がどのようなものになるか少々不安

だが」

「確かにだいぶ変わってそうだよな。この時代の連中は姉さんも含めてレースに全集中だけども、アタシらの時代だとトゥインクル・シリーズの選手はめっちゃアイドルだしな」

やはり、我らのレースは今進みつつある方向性により一層進んでいくらしい。英語で言うとエンターテインメントか。そういえば、先ほど彼女の口から語られた企画の名もまた横文字だった。

「トゥインクル……URAが今提案している新しいレースと催し物にそのような名前がつくのか……だいぶ未来に詳しくなれる情報を得られたな。タイム・パラドックスでも起きそうなほどに」

「未来を知り過ぎたなアサマ姉さん、怪しい連中に消されちゃいそうだな」

「簡単に消されてたまるか。貴様を吹っ飛ばしたようにせいぜい抵抗するさ」

「抵抗どころか殲滅だけどなあれ……」

さらに歩いて練習用周回コースまで来た。週末のレース本番に向けて最後の練習に励む生徒が、それぞれの教官とともに数組ほどいた。

「アサマ姉さんはここまでレース何戦してんだ？」
「二年半で三十二戦だ」
いたって普通の数字を回答したつもりだったが、大変な驚きをもって迎えられた。
「さんじゅうに!?　オイオイオイ死ぬわ姉さん」
「生きてるぞ？」
大げさな、という意を込めてさらに答えたが、彼女は大変な勢いで首を横に振った。
「アタシ達の時代だとＵＲＡ組は間が一か月空かなかったらそれだけで『多くね？』って言われるくらいだし、秋天で勝てるくらい強い姉さんレベルなら季節に一回しか出ないヤツだって多い」
一か月に一回、それよりもなお少ないことさえあるというのは現状に照らして大変な驚きだったが、そうせざるを得ない事情は、彼女の先ほどの語りから想像できた。そこに、最近工事が始まったダンスレッスン室と、新聞に小さく載っていたらしい話が繋がった。
「軟弱者め――というわけではないのだろうな。アイドルということは、今は学園の身内でやっている歌ったり踊ったりが大きな催し物になるのだろう？」
「おう。何万人だって集まるライブパフォーマンスだ。みんなテンションブチ上げでペン

ラ振り回してんぞ」
「細かい単語は分からないが、状況はおおむね理解した。そちらの練習にも多くの時間と体力を割かねばならないのであれば、上位層は大変だろうな。故障を防ぐためにもおのずと出走も少なくなるやもしれん」
「さすがだ姉さん、理解が早くて助かる」
ウマ娘とその競走の在り方も、この先五十年間で大きく変わることは明らかだった。もし私がそのまま彼女のいる未来に行ったとして、大きな舞台の真ん中で歌ったり、ダンスをしたりというのは無理そうだ。想像しただけで足がすくむ。
「姉さんがステージに立ったらみんな歌声に聞き惚れそうだ」
ゴールドシップの評に、私は大きく首を振って否定した。
「私は音楽が大の苦手だ……ここに来たら普通の中学高校と違って何も歌わなくてもいいから助かったくらいだ……」
「マックイーンみたいな声だから行けると思うんだがなー」
「いや、さすがに……」
少し試しに歌ってみようかという気になりつつ、いやこれはお調子者に乗せられている

だけだと自制したものの、やはり心の中が揺れ動いてしまう。そこでふと疑問を思い出した。

「そう言えば、貴様が昨日から時折口にする『マックイーン』について詳しく聞かせてもらってもいいか？　昨日の発言だとメジロの一族のようだったが」

「アタシの知る世界だとメジロの一族のすげー奴だよ。年の差からして、姉さんの孫くらいになるかもしれん」

「孫か……」

私もあと数年してこの学園を卒業したら、大学に何かを学びに行くにせよ、別の形で学ぶにせよ、ほぼ確実に誰かと結婚することになる。孫がいるらしいということは、子をなすということでもあり、そこまで考えるのは今の私の思考力には少々荷が重い。

ひとまず誰と結婚したら幸せになりそうかと考え、最初に思い浮かんだのが指導教官、次いで連想されたのが、意外にも今隣でニコニコ笑っている彼女だった。

……いやいやいや。女性どうしの恋愛にも似た親交は大正の世にありはしたが、結婚は無かったし、届はせずに一緒に暮らしているような事例も特に聞かなかった。だからあり得ない――というところまで考え、なぜ彼女との結婚うんぬんの話をここまで大真面目に

考えてしまったのかに気づいてしまった。

認めるしかない。彼女に対して恋心が芽生えてしまったことを。

私は案外簡単に心を奪われるし、しかも相手の性別すらも忘れてしまうくらいには想いが暴走しやすい質だったらしい。では彼女がウマ娘、すなわち同性であると再度認識し直して顔を見上げ、それでもやはり自分の顔が紅潮してむず痒くなるのを覚えた。

もはやこれは致し方あるまい。

「どうした姉さんぼーっとして。アタシに惚れたか？」

「そうだと言ったら？」

「いやーちょっと返答に困るぜ」

冗談めかして、実のところは本音を乗せた問いに対する彼女の言葉を、一般的な文脈で解読するなら、やんわりとした拒絶、だろう。真意を推し量ることは難しいが、少なくとも男女の間の告白のようにして、彼女に今しがた自覚したばかりの想いをぶつけたところで、私にとっても彼女にとっても良いことはない。

これは、言うべきではないことだ。

「そうか。ではその時は返答をひとつに絞るよう誘導尋問しよう」

「お手柔らかに頼む」

だから、冗談として流せるような返事にした。たとえ通じたとしても数日で永遠の離別となるやもしれぬ想いなど、抱かない方が良い。

「さて、と。学園の案内はこんなところだ。ボロいボロい言われてここまで傷つくとは思わなかった」

それなりに世話になっている学舎（まなびや）ゆえ、たとえ自身で古い、朽（く）ちかけていると文句を日々述べていても、それを外から来た人からあけすけに指摘されると泣きたくなってくる。

「悪かったって」

「まあ良い。これから綺麗にしていって、貴様らの世代に引き継ごう」

「よろしく！」
ここから先の予定は、朝に話したものひとつくらいだった。
「ここからどうする？　貴様の服、とりわけ下着を買いに行く予定だが」
「行こう！　と、その前に……」
「どうした？」
彼女が不思議そうな顔をして尋ねてきた。
「そういえば、アサマ姉さんは新年の一族の挨拶まわりとかはいいのか？」
「そのようなものは特にない。たとえ古くとも小さな家だからな。年末年始に帰っていないから来週里帰りはするが」
「ないのか？」
重ねて尋ねられた。まるで信じられないことを聞いたかのような声音だった。
「ない。……まさか五十年後のメジロはそんなに大きくなっているのか？」
「家主催のパーティーを開いたりするくらいには大きくなってるな」
思わず大きなため息が洩れてしまった。家の付き合いなるもので他の名家の集まりに参加することは年数回ほどあるが、それを自分の家、おそらく相当期間は私の主催で開くこ

とになると思うと今から憂鬱になってしまった。こうなるともう家なるものをなかったことにして、教官やこのゴールドシップと駆け落ちするのも一興、と益体もないことを考えた。

「面倒だな。私や親戚が家を大きくするよう努力した成果かもしれぬが」

「大変そうだな」

「さりとて、たった今から思い悩むことでもあるまい。嫌なら他の者に仕切らせて自分は隠れるとしよう」

「病弱な深窓の令嬢を装うか？」

「それは無理だな。芝三二〇〇を走り切って勝つウマ娘が病弱だと吹聴しても、誰も騙せるはずがないだろう」

　彼女の半ば投げやりな提案がおかしくてつい笑ってしまった。街へと歩いていく足の速さを少し緩めた。たとえほんの数秒であっても、一緒に歩き回る時間を長くしたいという、世界へのささやかな抵抗だった。

2　街でのひととき

ゴールドシップを連れて行った先は、私が折に触れて世話になっている百貨店だった。妙にそわそわとしている彼女を半ば引きずるようにして店内を進み、下着を取り扱うメーカーの直売店に到着。出迎えてくれた店員氏に依頼した。

「いらっしゃいませ。いつもありがとうございます」

「ご無沙汰しております。早速ですが、こちらの彼女に合う下着を何点かお願いします」

「かしこまりました」

「あっ、これ高けえ。ちょっとゴルシさん用事を思い出したので失礼しま」

「逃げるな」

私の低めの声にひるんだ隙に、彼女は目を輝かせた店員氏に引きずられて試着室に連れて行かれた。なぜか恨めしそうにこちらを見る彼女に小さく手を振って見送った。

三十分ほどして、少しばかり顔を紅くした彼女が出てきた。店員氏にお礼を言って店を

出て、次の売場へ向かった。その道中で彼女がしきりに制服の肩のあたりをつまんで引っ張ってきた。

「なあ、さっきの店の支払いはどうしたんだ？」

「貴様は今使える金を持っていないのだろう？　持っていない人間からは取り立てられんな」

「いやそうじゃなくてさ、姉さんからお店に払うお金。さっき何も渡してなかっただろ？」

「ああ。家に請求が行く。家にはもう連絡を入れているから安心しろ」

「お財布を出さずに買い物をするのを初めて見たぜ。ひょっとして姉さんってモノホンのお嬢様？」

「お嬢様お嬢様言われるのは好まないが、世間一般に言えばそういうことになる。普段はこういうことはほとんどしないが、必要な時に使えるものは惜しみなく使う。それだけだ」

「ほえー」

呆(ほう)けたような声を出した彼女だったが、すぐに表情を変えて不満そうな言葉をぶつけて

きた。
「ところでさ、さっきのお店じゃ姉さんのせいで怒られたんだぞ、ぶー」
「どうした薮から棒に」
『こんな良い胸をサラシで潰すな』だってさ」
「癪だ。貴様の胸を虚数サイズにしてやる」
「秒で罵倒された!?」
心温まるやり取りの後、洋服もいくつか見繕って買い、彼女に押しつけた。
「アタシ相手にこんなにあげちゃっていいのかよ。まるで男に騙されて貢ぎまくってる箱入り娘みたいだぜ」
「私は隣にいる人間がふさわしいものを身につけるよう指南しているだけだ」
かなり早口になってしまった。照れ隠しなのは自覚している。その内心を見透かされていたかいないか、彼女は『貢ぎ物』を受け入れてくれた。
「……ま、ありがたくもらっとくよ」
「しかしまあ、アタシはどうやったら元の世界に帰れるんだ？」

「さすがに分からんな……手掛かりをどう捜(さが)したらいいかも」
返事の声が少々硬くなってしまったことは否めなかった。彼女の言葉に、胸がちくりと痛んだ。昨日の今日でもうこんな感情を抱くことになるなど思ってもみなかった。小説ならば展開が速すぎるとして加筆再構成を要求されそうなところだが、事実は小説よりも奇なり。
たとえ遠く離れてしまうことを惜しむとて、それが彼女の不幸につながるようなことがあってはならない。何か良い方法はないか――。
「そうだ、こういう時の王道を思い出した。貴様はタイムトラベルが起きる前には何をしていた？」
事象が起きる前の行動を思い出させることで、原因を見極める手法だった。彼女は顎に手を当てつつ考え込んでいた。
「何やってたっけな。なんかチームのみんなと集まって小さなパーティーをしていた気がするんだがなー」
「その時に誰かに何かされたり、というのは？」
「マックイーンのお腹を揉みに行ってフルパワーでぶん殴られて意識を失ったかもし

れん」

こちらの意識の方が遠のくところだった。人様のお腹を揉むとは一体何をやっているんだこのアホウは。それに対する仕返しとしての衝撃、しかも物理的な攻撃ならば、まあ、何があってもおかしくはないといえなくもない。

「完全にそのせいなのではないか？」

「かもなー」

彼女もすぐに納得したようで、あっけらかんとした感じで受け入れていた。

こういう時の戻り方といえば、同じ衝撃を与えることが有力ではあるが……。

「私が貴様を殴って意識を飛ばせば戻るかもしれんな。貴様をここに送ったと思われるメジロマックイーンなる者と私はよく似ているそうだから、効果は絶大であろうな」

軽く拳を握って彼女の前でひらひらと振ると、ゴールドシップは即座に顔を青くしてすがるように止めにかかってきた。

「いやいやいやまたあのパワー食らったら本当にゴルシちゃん死んじゃうって！」

「冗談だ。とはいえ最終手段として考慮には入れておこう」

「その時は予告してくれよな？」

あまりにも真剣な表情で頼むものだから逆におかしくなってしまった。安心してくれ。もしそれをしなければならなくなったら、私としても心の準備が必要だから。

そこからしばらくは街めぐりとなった。ゴールドシップはまるで何にでも興味を示す子どもであるかのように、三歩歩いては立ち止まっていろいろ眺めたり、触ったり、物を拾ったりするので、なかなか先に進めなかった。私自身も今までそれほど街を巡ることがなかったのでいろいろと新鮮な発見があった。

ちょうど昼時になってお腹が空いてきた。彼女も同感だったらしい。

「腹減ったなー、このへんマックとかねーかなー」

「マック？」

聞いたことがない店の名前だった。おそらく今この時代にはない店かもしれない。もう少し詳しく聞いてみた。

「どのような店だ？」

「あれだよ、黄色にMのマークでハンバーガー売ってるとこだよ」

「ハンバーガー……ああ、アメリカにあるあれか。なんか来年あたりに日本上陸とか聞い

たことがあるようなないような」
「なんだって!?」
窮屈に感じる集まりに顔を出していると、ウマ娘のレースとはまた別の世界の話も色々と耳に入ってくる。その中のひとつに、新しい飲食店の話も時折交じることがあった。彼女の話によれば、その店は一過性のものではなく、全国に広く定着するらしかった。
「貴様の時代にはいろいろ面白い店があるようだな。とはいえ今ここにはない。ここは私に任せよ」
「よろしく頼む……」

少し歩いて、一軒の喫茶店に案内した。私が街に出る時の数少ない目的地のひとつだった。マスターとはしばらくぶりの対面だった。
「ようこそお越しくださいました。お久しゅうございます」
「ご無沙汰しております」
「いいえ。だいぶ遅くなりましたが、先日の天皇賞での勝利、おめでとうございます」
「ありがとうございます」

窓際の席に座り、コーヒーとオムライスを注文した。
「いい雰囲気のお店だな。こうした店はアタシの時代にもばっちりあるから安心する。値段もお手頃だしな。お嬢様が庶民にもやさしい店を知ってて助かったぜ」
「この価格で？　ああ、物価が違うのだな」
彼女に今この時のいろいろなものの物価を教えた。自分で買い物をすることは少なくとも、ある程度は店頭で見聞きして知っている。私の説明を受けて彼女は頭の中で五十年後の物価に換算したらしく、どんどん顔色が青くなっていって、しまいには目を回してしまった。
ちょうど目の前に運ばれてきたコーヒーを恐怖感が伝わるような表情で凝視しながら、彼女がつぶやいた。
「高級喫茶かよ……」
「ここはそうだな。街には貴様も目を回さない感じの店はあるから安心しろ」
「おう……気が遠くなりかけたが、このまま気絶してたら元の世界に戻れたかもな」
目を回したままの彼女がそうつぶやいた。その言葉に、私は可笑(おか)しさとともに哀しさも感じた。哀しさの感情を表に出すことははばかられたので、今朝と同様に半分だけ今の気

持ちを乗せることにした。
「そうかもしれぬな。だがそれだと私にとっては少々面白くない。貴様がこの世界で驚くところをもっと見てみたいからな」
「めっちゃ他人事だな」
「他人事だからな」
不満そうに見えてその実楽しそうな彼女の姿を見ていると、私の顔も自然と緩んでくる。休み明けに教官に会ったら表情に締まりがなくなったと言われるかもしれない。
「せっかくだし、この世界にいる間に多くの驚きを得るといい。たとえばここのコーヒーとオムライス。価格に見合う美味しさであることは私が保証しよう」
「姉さんが言うと説得力があるな。姉さんの孫かもしれないマックイーンが美味しいものに目がないくらい味にはうるさいから」
「そうか」
「まあ、でもマックイーンはよく太り気味になって、毎回泣きながらダイエットしてるんだよな」
選手たるべき者にとって避けるべき単語が聞こえてきた。私の孫になるかもしれない

人物はきちんと走れるのだろうか。まだ生まれてもいない者を心配するのは奇異ではあるが。

「よく太り気味になるとは、選手として活躍していけるかとても心配になるのだが」

「大丈夫だと思うぞ？　あんな感じでいてきちんと独りで減量できてるし、めちゃくちゃ強くなりそうだからすげーんだけど。姉さんみたいに天皇賞獲れるかもしれねえ」

「ほう」

自制心は少々怪しそうだが、自省の心と行動力があるならば問題はなさそうか。しかしながら、それならば食事の時点で気を遣ったほうがよいのではと思わなくもなかった。

話しているうちにオムライスも運ばれてきた。手を合わせて食べ始めると、向かい側の彼女は二口目から手の動きが速くなり、一心不乱に口に運び始めた。言葉がなくても伝わる最高の意思表示だった。見ているだけでこちらも嬉しくなってくる食べっぷりだった。

「ふう……姉さん、ちょっと相談があるんだが」

「お代わり注文は二回まで許す。さすがに三回目以降となると私の手持ちが消えるが」

「じゃあ遠慮して二回まで……」

「遠慮……？」

提示分の満額を受け取るのは遠慮であるようには見えなかったが、本当は何回でもお代わりしたかったという、オムライスとここのマスターへの賛辞として捉えておこう。

彼女はその後二個目、三個目とオムライスを瞬時に平らげた。三個目を食べ終えた後も物足りなさそうな顔をしていたが、さすがに一介の高校生には少々負担の大きい支払いとなり無理だったので、自分のオムライスを半分分けた。

「いいのか？」

「私はいつでも食べに来ることができる。貴様はいつ来られるか分からない。どちらが食べるべきかは明白だろう？」

「姉さん……！」

涙を滝のように流しながら食べる様を見ていると、ますます嬉しくなる。カウンターの向こうにいるマスターも彼女の姿をちらりと目にしたのか、いつになく嬉しそうにしていた。

永遠にとは言わないけれど、この、つい昨日得たばかりの初めて知る幸せな時間がまだまだ、せめてあと少しだけ長く続いてほしいと願った。

さらに街を巡った後、夕食はゴールドシップが見つけたラーメン店で摂ることに決めた。

「ラーメン屋とか中華料理なら昔から今まで変わらないものがあるもんさ。こう、メニューと店の形とか、もっと言えば精神といったもんがさ」

「ふむ……」

「そんな感じの店ならアタシのノリで行けるぜ！」

「そうか。ならば頼む。私はそうした店に行くことがなくてな……」

「やっぱ初めては勇気がいるけど、一回行ってみたらハマるかもな」

歩くことしばし、彼女が『乙女のカン』と称して見定めたラーメン店ののれんをくぐった。ちょうど人が途切れたあたりなのか、他の客の姿はなかった。

「いらっしゃいま、せ、!?」

こちらに声を投げ掛けたご婦人の店員氏が、私を見るなり固まってしまった。……今日一日まったく意識していなかったが、私の名と姿を知る人は多いはずだった。学園のある府中や、レース場がある地域ならば街の人々も名のあるウマ娘の存在に慣れっこのはずだが、さすがにここまで離れるとそうでもなかったらしい。

「あ、えーと、メジロアサマさん、ですよね？　この前レースで勝ってた」
「はい。メジロアサマと申します」
ご婦人が口をパクパクさせて固まっているところに、カウンターの向こうから店主の男性の声が聞こえてきた。
「おーいどうした？　……失礼」
店主がこちらに来てご婦人の肩を叩いて我に返らせた。
「お客さんを立たせたままにしてどうする。早く案内してやりなさい」
「……あ！　ごめんなさいね！　ちょっとびっくりしちゃって！　こちらどうぞ！」
店主から一流のレストランの料理長と見紛うほどの美しい所作で一礼を受けたのに返礼をしつつ、慌てて先導するご婦人とゴールドシップを追った。
やや奥にあるテーブル席に通され、座るや否や、私に何を食べるか聞くことなく、ゴールドシップがラーメン・半チャーハンセットなるものを二人前頼んだ。
「おい」
「アタシの勘でこれは鉄板のうまさだって見抜いた。アサマ姉さんに最初に食わせるならこれだってな」

「鉄板？」
「まあ、王道、安定、間違いがないって意味だ」
「ずいぶん奇異な語法だが、聞けばすんなりと理解できるな……」
「うっかり使わないでくれよ。歴史が余計に修正されてしまうかもしれねえ」
「そうだな」
いずれ少し使ってみたくなったが、下手なことをして未来の彼女に会えなくなったら困るので封印しよう。
「ラーメン半チャーハンセットどうぞ！」
あまり待つことなく二人前の料理が運ばれてきた。見るからにとても美味しそうだった。その後、ご婦人から依頼があった。
「あの、差し出がましいお願いで申し訳ないのですが……お食事の後でサインをいただけると……」
「サインですね。書き慣れなくて変な形になるかもしれませんが、お受けしたいと思います」
「ありがとうございます!!」

「アタシのもいるか？」
「貴様はやめとけ。後で諸々差し障りがある」
「ちぇー」
ラーメンとチャーハンは大変美味だった。私は今までラーメンやチャーハンを食べる機会がほとんどなく、学園に来てから一回食べたかどうかくらいで、学園で供されるそれらはお世辞にも美味しいとはいえない存在だったので、とても感動した。
「目が輝いてるな姉さん。気に入ってくれたようで何よりだ」
「『店ごと買い上げたい』という言葉を初めて使いたくなった。……実家に連絡するか」
「おっと姉さん金持ちムーブメントは封印してもろて、右手に持った十円玉の束もしまおうな？　店先の公衆電話を使おうとするあたりお嬢様なのか庶民なのかわからんな……」
「冗談だよ。さすがに買収はしないが、ぜひとも通おうと思う」
食べ終わった皿を下げてもらい、色紙二枚にサインを描いた。天皇賞の時は希望者が殺到したため、URAとトレセン学園の計らいで後日改めてサイン会を開いたのを思い出した。あの時ずいぶん描いたはずだが、やはりうまく描くのは難しい。
「さて……あ、おいコラ！」

「へへっ、ちょっとアタシもサイン」
いつの間にか色紙の隅にゴールドシップが何かを書き足していた。「G．S．」という文字が加わり、まるでサイン全体を彼女が描いてそこに名前を入れたかのようになってしまった。
サインが描けたことを伝えると、店主がこちらに見えた。
「本日はお越しいただきありがとうございました。若輩の折、メジロ家に一時お世話になりました縁があり、メジロアサマ様のご活躍をささやかながら応援しておりました」
「ありがとうございます。今後とも精進して参ります」
「すげー、一流のあいさつだ……さすが姉さん口調が臨機応変」
微笑みながらゴールドシップの方を睨んだ。後で処す。

退店して店が見えなくなったところにちょうど公園があったので、彼女に不意打ちで蹴りをくれてやって植え込みに突っ込ませ、目を回したところをそのまま引きずって寮に帰宅した。玄関先に転がった泥だらけの彼女は恨みがましい目でこちらを睨んできた。
「バイオレンス姉さん……」

「そのような名に改名した覚えはない」
「茶々入れて悪かったって……」
ゴールドシップの耳と尻尾が萎(しお)れてしまってさすがに可哀想になったので和解条件を出した。本当はそんなものなどいらなかったが、ある種の挨拶というものだった。
「ふん……そうだな、誠意はプリンの形をしているというのが私の認識だが、貴様はどう思う？」
「押忍(おす)！　ひとっぱしりコンビニ行ってきま――」
「待て」
もう夜もいい時間になろうという時にすごい勢いで寮を飛び出して行こうとしたので慌てて止めた。
「コンビニとは恐らく貴様の時代にある何らかの店だとは思うが、そのような店はこのあたり、いや、今この時には無い」
「ええ……」
「そうげんなりした顔をするな。ちなみにスーパーマーケットもじきに閉店時間だ。だから明日だな」

「なんか不便だなーもー」
「そのようなものだと思えば楽になるぞ」
そう遠くない将来、夜中でも食べ物や飲み物を買いに行ける店が一般的になるらしい。
それが便利かどうかは私には分からないが、少なくとも、すぐにプリンを食べられるというのはなかなか魅力的だった。

第四章　告白、再会の約束

それから数日、寮の一室での共同生活にもだいぶ慣れてきた。相変わらずひとつのベッドに一緒になって寝ていて、お互いに暖を取り合うことができるので、外の寒さにも対抗しやすかった。寮の暖房設備が老朽化（ろうきゅうか）していたため、お世辞にも暖房が効いているとはいえず、その点では新しい寮である栗東寮・美浦寮の建設が私の学園生活に間に合ってほしかったが、今更なんともならない。

座学の講義や中等部生の集団トレーニングが再開される時期となり、この府中寮にも一気に生徒が戻ってきていた。ゴールドシップ、対外的偽名『ホシハタ』はあっという間に有名になり、彼女の持ち前の明るさ、人当たりのよさもあって、わずか一日ほどでファンクラブが結成されてしまった。

「ずいぶんファンが増えているな。人気者すぎて嫉妬しそうだ」
「お、嫉妬しちゃう？」
「してみるか。三女神像の前にみんなを集めて『ホシハタは私のものだ』って大見得を切ってみるのもいいかもしれん」
「情熱的だなアサマ姉さん」
「そうだな」
軽い感じで口にしてみたものの、かなり際どい、それどころか直球な宣言だった。もちろん分かっていて口にしたことだが、わりと軽めに流されてしまったようだった。さすがに暴力で吹き飛ばした相手から一週間足らずで告白されたとして、額面通り受け取るような人間がいたらそちらの方が心配になる。だから仕方がない。でも残念だった。
私は今日は座学の予定となっていた。講義を受けている間、彼女は編入学生・短期交流生向けの学園案内に参加する手はずとなっていた。
なっていたはずだが。
「なぜ貴様が私の隣にいる？」
「案内のおっちゃんに、もう先週姉さんに案内してもらったって言ったら、じゃあここで

講義でも聞いてけってさ」
「誰だその適当なおっちゃんとやらは」
「あのおっちゃん」
彼女が指差す先には、ちょうど講義のために教室に入ってきた教官の姿があった。
「新年最初の講義だー、今日は特別ゲストがいるぞー。ほれ、ホシハタさんこっちこっち」
対外的な説明の通りトレセン間交流で来たという体で自己紹介をして、教室内が一気に盛り上がった。この教官の指導科目はウマ娘の歴史で、私が以前考えたように教官も彼女のことを歴史上の存在・ホシハタにそっくりだと考えたらしく、本来の授業を盛大に脱線してその時代の話だけで一限五十分を使い切ってしまった。
講義終了後、私はまだトレーニング再開前だったので、ゴールドシップとともに校内の散歩に繰り出した。一応彼女が元の時代に戻るための手掛かり捜しという名目は続いていたが、最近は本当にただの散歩、お喋りをするひとときと化していた。私としてはデートと呼んでも差し支えないくらいの気持ちだったが、彼女は特にそうした意識は持っていないはずだった。

周回コースでトレーニングに励む生徒たちの様子を横目に見ながら歩いているところ、突然彼女が一言告げた。
「なんかヤバくね？」
「唐突だな。ところで『ヤバい』とはどういう意味の単語だ？」
彼女が繰り出す珍奇な新語もだいぶ直感的に意味を取れるようになってきたが、これはまだ分からなかった。
『ヤバい』は分かんねーか。この場面なら『ちょっと焦(あせ)りの気持ちが出てきた』くらいの意味だ」
「なるほど」
「そう、ちょっとヤバいんだよ。元の世界に戻る方法も手掛かりもまるでわかんねえままだ。別に姉さんとの時間が嫌ってわけじゃないし、むしろ居心地がいいくらいなんだが、それでもこの世界に長居しすぎちゃいけねえって思うんだ」
先ほど自分も考えていた通り、手掛かりも何もなかった。
「かくなる上は、最終手段として貴様を本当に物理的に吹き飛ばして送り返さねばならんか……」

「できればやってほしくはないが、必要なら」
「検討はしておこう」
再び歩き始めて、空気を多少変えようと話題を少しずらしてみた。
「しかし『ヤバい』という単語、何やら便利そうだな。今度使ってみるか」
「やめとけ。歴史が変わってしまって語源が姉さんになってしまう」
「メジロの名が歴史に残るならいいかもしれんが、それで貴様の未来での居場所が消えたら困るな。バタフライ・エフェクトという奴が起きてしまいそうだ」
「ずいぶんいろいろ知ってんだな」
「ＳＦ、特に時間移動ものは好きだからな」
もしバタフライ・エフェクトが起きるとしたら、今ここで私と彼女がこうして交流していることも、まさしくそれを引き起こし得るものであり、特に彼女の未来に直接的影響を及ぼしそうではあった。そのせいで彼女が行き場を失っては大変だが、一方で、少しだけずるいことも考えてしまっていた。
今ならまだ冗談として昇華（しょうか）できるかもしれない、そう思って口にしてみた。
「まあ、何にせよ、もし戻れなかったらうちにいろ。貴様が見てきた歴史の通りなら、私

が秘書を雇うこともあろう」
「その時は頼む」
あっさりとした返事が返ってきた。ならば、とさらに一歩踏み込んでみた。
「何なら伴侶でもいいが」

「ごブォッ！　ゲホゴホゴホッ！」
その反応に、私はかすかな喜びを覚えた。それはつまり、彼女が私のこの『冗談』に対して、単に冗談として受け流してしまうような薄い感情ではなく、こうして驚きの反応を示してしまうほどには何かしら『想う』ところがあるかもしれない、という希望を得られたからだった。
心臓が高鳴り、すでに周りの音も耳に入らなくなっていた。動揺する心を必死で抑えつつ、平静を装って言葉を続けた。
「そこまでむせることなのか。まあ、この時代ではまだ特段の例がないし、もしやるとなると貴様が会うであろう私の孫が生まれなくなって、また歴史が変わってしまうな。フフッ」

「際どい冗談はやめてくれ」

彼女の口調からは、いつも見せているはずの余裕が消え失せていると感じ取ることができた。その後ろにあるのはやはり拒絶。予想していた通りではあったけれど、やはり寂しかった。これ以上私の思いを口にするのはやめた方がいいと分かっていたが、数秒考えて、それは無理だと悟った。彼女を傷つけてしまうかもしれないが、せめて直接突き刺さる刃となることがないよう、慎重に話を始めた。

「……冗談ではないが、冗談であった方が良いなら、冗談ということにしよう」

一瞬だけ、彼女の方を見た。その表情から、先の言葉だけで、私の言わんとすることを過不足なく汲み取ってくれたと分かった。これ以上は蛇足、もう分かりきった答えを前にして、それでもそこにたどり着くための道を整備しようとする徒労かもしれない。それでも続けた。さすがに彼女を直視できなかったので、目をそらし、視線を落とした。

「私は交友関係がとても狭い。極言すれば学園で独りぼっちと言っても過言ではない。そ

れゆえ、貴様といたこの数日がとても楽しかった。それこそ『勘違い』してしまうくらいにな」

偽りのない本心だった。彼女に今すぐにでも改めてきちんと告白をしたかったが、拒絶されると分かっていて実行に移すのは、私には無理だった。せいぜい、こうして告白ではないと言い訳できる形で言葉を繰るだけしかできなかった。

私の言葉に、ゴールドシップはしばらく沈黙していたが、返事をくれた。

「アタシも、別の世界ではマックイーンを好きになったことがある。アサマ姉さんとそっくりだから、この数日どきっとすることばかりだった」

彼女の心の内を聞けた。決して一方通行の想いではなかったと知ることができた。しかし、彼女の心の内にある相手は、私ではないことも分かってしまった。そして、私の孫であるかもしれない私そっくりの子もまた、彼女が真に見ている相手ではないことも。

それゆえ、これ以上の話は差し控えることにした。

「そうか。……ならばこの話は五十年先の孫とやらに任せるとしよう。私の系譜であるならば、この世界の孫もまた貴様に恋をするかもしれぬからな」

「すまん」

「謝るようなことではない。むしろ人生の楽しみが増えた。今は孤独でも、頑張っていれば未来で貴様とまた会えるのだからな」

五十年先の再会、そして自分ではなく子孫との関係構築を願った。でも、最後にひとつだけ自分の手で叶えたいことがあった。

「このような重苦しい話をしておいて恐縮だが、手を、つないでもいいか？」

黙って頷いてくれた彼女に甘えて、手をつないだ。それからすぐに手を離し、彼女の腕全体に寄り添うように掴まった。

ただ受け入れてくれた彼女とともに、ゆっくりとした足取りで寮に帰った。

部屋では特に話すことはなかった。でも、それは気まずい沈黙ではなく、安らぎのある静寂だった。ともにベッドに腰掛け、身を寄せ合って、ともにいた。

そして、彼女を元の世界に帰す、ある方法を思いついた。大変ありきたりな、ベタな、彼女の使う新語で言えば『鉄板』なのかもしれない。もし成功したら、世界はあるべき姿に戻るし、何も起きなかったら私の役得になる。

ただ、私の勘によれば必ず成功する。そしてそれは彼女との五十年間の別離も意味して

いた。

迷った。しかし、彼女が本当の在り方で本当の幸せを手にするためには、ここにいてはいけない。

だから告げた。

「そうだ。貴様が元の世界に戻れそうな方法をひとつ思いついた」

「何だ？」

覚悟を決めた。

「まあ、ちょっと目を瞑(つむ)っていてほしい」

私の指示通り目を瞑ってくれたことを横目で確認し、立ち上がって彼女の正面に移動した。

彼女の頬に手を添えた。豪放磊落(ごうほうらいらく)な性格に似ず念入りに手入れしているのか、柔らかく透き通るような肌の感触を楽しみつつ、私も目を閉じて、……彼女に唇を重ねた。

彼女が身じろぎする間もなく、私が再び目を開ける間もなく、唇に感じていた彼女も、手に感じていた彼女も、静かに消え去っていた。

虚空に向けて、餞(はなむけ)の言葉を贈った。

「またな。短い間の、愛しのパートナー」

第五章　彼方への航路

1　喪失と救い

一瞬のうちに姿が消え、ただ独りだけの空間に戻ったベッドに座り、そのまま力が抜けて倒れ込んでしまった。

「ああ……五十年先か……私だけ婆さんになってしまうな……」

自分の今までの人生の三倍もの長さ、想像もつかない永遠とも言える先の未来、果たして私はそこに辿(たど)り着けるのだろうか。彼女と、本当にまた逢えるのだろうか。

たった一週間しかそばにいなかったのに、彼女・ゴールドシップの存在は私にとってとてつもなく大きくなり、また、代えがたい存在となっていたと気付いた。これほどまでの喪失感を抱えてしまうなど、全く想像もつかなかった。もしこの先、足の怪我で走ることが叶わなくなったとしても、ここまで苦しい思いを抱くことはないだろうとさえ思えた。

「逢えなかったら……嫌だな……、」

自ら洩らした言葉が耳を通って自分の頭に還ってきた。恐怖がはっきりとした形になり、涙がこぼれ始め、そして止まらなくなった。私のほかに誰もいない空間に戻ってしまった部屋の中で、ひたすら声を上げて泣いた。これほど泣いたのは生まれて初めてだった。いつ眠りに落ちたのか自分でも覚えていない。意識を取り戻した時、外はすでに明るくなりつつあった。

それから五日間寝込んだ。わずかな気力で風呂にだけは入ったものの、あとは部屋で横になったまま動けなかった。数少ない部屋の出入りの時にはそれなりの数の寮生とすれ違ったはずだが、つい数日前まで大いに話題になっていたはずの彼女の名前を一言も聞かなかった。きっと、彼女が五十年先の未来に帰ったことで、寮生達の記憶から彼女の存在

が丸ごと消えてしまったからに違いなかった。答え合わせをするのが怖くて、誰にも「最近来た『ホシハタ』と名乗っているウマ娘を知っているか？」と訊けなかった。

沈みきった五日目、部屋の扉をノックする音が聞こえた。

「……どうぞ」

「アサマちゃん、入っていいかい？」

寮母さんだった。私がドアを開けようと思った時にはもう部屋の中まで入ってきていた。枕元までやってきて、私の顔を覗き込んだ。心配そうな、私を気遣ってくれているのがありありと分かる表情を見て、とても申し訳なくなった。

身体を起こして、寮母さんと向き合った。

「何日かぜーんぜん姿見ないし、他の生徒さんも口々にアサマちゃんが来ないから心配だって言ってて、ちょっと様子を尋ねてみようかなって思ったんよ」

「すみません……」

「この婆ちゃんに話せることがあったら何でも話すんよ～」

寮母さんが出してくれたお茶とお茶菓子を頂きつつ、少し、話してみようと思った。

「話を、聞いてもらってもいいですか」
「どうぞどうぞ！」
「恥ずかしながら、失恋、らしきことを経験しまして……少々、立ち直るのに時間がかかっております」
「あらー……」
寮母さんは目を丸くしていた。それもそのはず、それまで名実ともに誰とも付き合っておらず、たった一週間だけいた彼女の存在は世界から記憶ごと消えてしまっているから。
「やっぱり、アサマちゃんもちゃんと学生さんしてたんだねえ。あ、ごめんなさいねえ、アサマちゃんは他の生徒さんよりもずっとトレーニングしてらっしゃるでしょう？　失礼だけどどなたかとお付き合いなんて想像もできなかったから、ちょっとびっくりしちゃった」
「……確かにそうかもしれません」
「あたしも恋なんてよく知らなかったから何も言えないんだけどねえ、こういう時はいっぱい泣いて、いっぱい食べて、いっぱい寝るしかないねえ」
「そう、ですね……ふふっ」

話していたらだいぶ気が楽になった。そして、空腹だとようやく気がついた。寮の食堂で食事が出される時間はまだ先だったので、食事を摂るために学園に行こうと制服に着替え、部屋を出たところで声を掛けられた。

「――アサマ先輩！」

「どうしました？」

「よかった、生きてた……」

名をよく知らない後輩が大変な勢いで抱きついてきたので、うっかり姿勢を崩して尻餅をついてしまった。その後輩が私の胸に顔を埋めて大泣きしたものだから、しばらく動けなくなり、さらに泣き声を聞きつけた寮生達がたくさん集まってしまった。

その後輩を連れて寮の談話室に行き、泣き止んだところで話を聞いた。やや離れたところに他の寮生が多数集まっていて、ウマ娘の耳ならば話は全部筒抜けになるのは自明だった。彼女も取り立てて隠すような話はしないとのことで、横に野次ウマ……聞き耳を立てる寮生がたくさんいるのを受け入れてくれた。

「私、アサマさんの大ファンなんです！」

「ありがとうございます」
「年明けからしばらく学園にも来てらしたのに、ここ最近急に姿をお見かけしなくなって、年始の里帰りでもされているのかなと考えていたら、部屋からほとんど出てこない、重い病気になったんじゃないかって噂が流れてきて、居ても立ってもいられなくなって……」
先ほどの寮母さんとの話で聞いたことといい、後輩の証言といい、私の認識に反して、私のことを見てくれている生徒はとても多かったらしい。それこそ、数日引きこもっただけで重病説が流れてしまうほどに。
「そうでしたか……ご心配をおかけして申し訳ありませんでした」
思わぬところで大きな心配を掛けてしまっていたことを率直に詫びたら、後輩は音が立つほどに首をぶんぶんと横に振った。
「いえ！　だいぶお元気そうで何よりです！　アサマさんの中では元気ではないほうの体調かもしれませんが……」
「いえ、先ほど寮母さんにお話を聞いていただいて、さらに貴女の訪問を受けて、とても元気になりました。ありがとうございます」

「そんなお礼なんて！」

「それだけありがたかったのです。ここ数日、私としては初めての感情といいますか、大変な動揺を覚える事態を体験しまして、体調を崩してしまっておりました。決して悪いことではなかったのですが、初めてのことで、恥ずかしながら自分だけでその動揺を処理できなかったのです」

「そうだったんですね……。つかぬことをお伺いしますが、それはどのような感情だったのでしょうか……？」

まさに核心を尋ねられた。誰でも気になるに違いないことだった。視界の片隅で明らかに複数の寮生の耳が明確にこちらに向いた。……少々気恥ずかしくはあるが、取り立てて隠すことでもあるまい。

「そうですね。うまく言い表すのは難しいのですが、あえて喩えるならば……『恋』、でしょうか」

後輩の顔に驚きの表情が浮かぶのと、近くの寮生達が歓喜の悲鳴を上げるのとはほぼ同時だった。しばらく噂になるだろうが、この際受け入れるとしよう。

後輩から『これからもあらゆる方面で応援します！』とありがたい言葉を頂いて別れ、

ひとまず学園の食堂へ向かった。食事を摂っているうちに、明らかに私の方を見る生徒が増えてきていた。この短い間に、誰かが寮からこちらまで来て私の話を広めたに違いない。やはり、色恋沙汰は大きな話題性を持っているか。

少々後悔したのが、この噂なるものが、学園に所属している私の遠い親戚を介して両親にまで伝わってしまったことだった。鉄道と連絡船を乗り継いで北海道に帰省するまでの数日間のうちに話が大きくなり、しかもその過程で肝心の『別れた』『失恋した』の部分が欠けてしまっていたため、まさに今、現在進行形で恋愛をしていると受け取られてしまい、遠回しにその相手を連れてくるよう言われてしまった。話の雰囲気からして、両親が認めたらそのまま縁談が進んでしまいそうな状況だったため、うまく取り繕うのに苦労した。

いざとなれば、今世話になっている指導教官を両親に紹介しようと考えた。ゴールドシップに出会うまでは他者との交流はほとんどその指導教官が相手で、恋愛感情と言えなくもない、単なる親しさとは異なる感情を抱くことがあるのは確かだった。

2　生涯の伴侶

二月上旬、指導教官と久々に対面した。一月空いたのはなかなかに長く、年始のあの一週間のために、それ以上の月日が流れた気分だった。

「失礼」

教官室の扉を開けると、慣れ親しんだ姿があった。

「お久しぶりですアサマさん。お元気そうで何よりです」

「ああ……先月はちょっと元気では無かったんだが」

「おや、どうされていましたか。……私がここに来るまでにまわりから聞かされた話は少々ありますが、噂話をうんぬんするよりも、アサマさんから直接伺う方がよかろうと思いまして。もちろん、私に対して話をしたいという意思があるならば、ですが」

いつもの柔らかい物腰で声を掛けてくれた。この学園は一癖も二癖もある人間だらけであるため、彼のような存在は極めて貴重だった。

「少しばかり長い話にはなるが、話してもいいだろうか？」
「喜んで。アサマさんが長い話をされるのはめったにないことです。何日でもお付き合いしますよ」
「さすがにどんなに長くなっても数時間くらいだとは思うが」

彼には包み隠さず話した。未来人を称するウマ娘との一週間の生活、その時の感情など、話がどんどんあふれてきたが、それを遮ることなく、すべて聞いてくれた。私が話し終えると、彼は静かにハンカチをこちらに差し出した。自分が涙を流していることにようやく気がついた。
「ありがとう」
「いえ、泣いている方が目の前にいるならば、できることはしたいので」
「そうか……やはり貴方は優しいな」
「時々言われます」
「そう、貴方は優しい。こうして私の話を聞いてくれて、いつも鍛錬（たんれん）の面倒を見てくれて、他にも様々な場面で陰になり日向（ひなた）になり支えてもらって、そうして私はここまで来る

ことができた」
「お褒めに与り光栄の極み」
「ふふっ……そう、この先もずっと、引退しても、年を取っても、ずっとそばで支えてもらい、私も貴方を支えて、共に在りたいと思った」

しばらく、沈黙があった。話の流れのままに教官にも想いを伝えてしまったが、誤解があってはいけないと思ってさらに慌てて付け足した。
「いや、先の話からの流れだと、まるで私が恋愛の相手を即座に乗り換えた尻軽みたいに見えてしまうが、決してそうではなくて……」
「……大丈夫ですよ、アサマさん」
教官は一息ついて、話し始めた。
「実はアサマさんの噂話は、当のアサマさんのご両親からのお尋ねがあったことで知ったと、あらかじめ告白します」
「なんと……両親が……」
思わぬ話の回り方に、内心頭を抱えた。

「ご両親からの話ですと、アサマさんがまさに恋をしているという内容にすり替わってしまっていました。しかも『その相手はひょっとして君なのではないか』と、電話口でかなり前のめりな話をいただきまして」

「大変申し訳ない……」

「先ほどの話で、その噂話そのものはご両親の推測とは全くの別物だったと判明しましたが……最終的な結果は同じになりそうです」

私がその言葉を頭で処理できないでいるうちに、次の言葉が届いた。

「メジロアサマさん、ありがとうございます。私としても、この先も永く、貴女とともに在りたいと思っています」

お互いに握手し、そして抱き合った。

五十年先の未来まで、さらにその先の未来まで、彼女と再会できる未来まで、ともに歩める人ができた瞬間だった。

第六章　五十年目の再会

指導教官との婚約は学園ではよくある出来事で、両親もそもそも噂話の時点で教官に電話を入れたくらいであるから、今回の話に反対するはずもなく、事はすんなりと進んだ。

もちろんすぐに祝言（しゅうげん）を上げたわけでなかった。まだ高等部一年相当であったし、体力もあったので、レースに挑戦できる限りは挑戦して走り続けた。今までと同じようにほぼ一か月に一回出走していたので、ゴールドシップが聞いたらまた目を回すに違いなかった。

この年の年末も二回目の有馬記念の挑戦を目指したが、その冬に大流行したインフルエンザに見事に巻き込まれてしまい、出走を辞退せざるを得なくなった。しばらく寝込んでいた時に、横に彼女がいたら多少は気が紛れたのかもしれないと、寂しさが蘇った。

翌年も幸い走り続けることができ、宝塚記念で六着になってしまったことを除けば必ず入着、あるいは勝利を飾ることができた。教官とも話し合って、今年最後の有馬記念に挑戦して引退することを決め、そこに向けて調整を行った。

二年ぶりの中山で、二番人気、二着。四十八戦にも及ぶ出走の締めくくりは、あと一歩、届かなかった。

一番人気にしてその人気に応えた一着の子・イシノヒカルはクラシック級からの参戦で、今年の皐月賞は二着、ダービーは六着となるも、菊花賞で勝利した若き才能だった。私にとっては大変残念だったが、これが世代交代というものかもしれないと思った。それゆえ、彼女がこの直後に体調を崩し、翌年秋に無念の引退に至ったことは、彼女とともに走り、後塵を拝した者として大変残念に思った。

引退後はしばらく学園に勤めて指導教官——夫と後進の育成に努めつつ、家業を継ぐべく大いに学んだ。ウマ娘の子も数名生まれ、そのうちのひとり、メジロティターンの名を授かった子は秋の天皇賞を勝つことができた。

いつしかメジロの家も名門と呼ばれるほどに大きくなり、とても面倒な付き合いという

のも増えた。かつてゴールドシップ相手にこぼした時に提案があったように、病弱を装ってパーティーへの参加を断ろうと画策したものの、古くから世話になっている執事長やメイド長にたしなめられてしまった。

「お嬢様……いえ、当主様。芝三二〇〇を駆け抜けて勝ち、引退のその日まで健脚を保って、さらに精力的に活動されている御方がいきなり病弱になったと姿を隠したところで、それを信ずる方がいらっしゃるでしょうか？」

「……それもそうだな」

「つい先週も、街頭で大盛りのパフェを完食なされたとの噂が耳に入りました。三十代にして健啖家であるのは大変喜ばしいことです。周囲には元気溌剌、活力十二分の女当主との名が轟き、同じ女性として誇りに思う次第です。それゆえ、病気を理由にお隠れになられても、すぐにぼろが出ると思われます」

「メイド長は容赦がない……」

「家のものには直言せよ、古くからのメジロの教えを実践しております」

「忠言感謝する……」

夫の定年退官を期に北海道へ戻り、ウマ娘の保育所、競走養成所を開いた。メジロ家の

者だけでなく、近隣の有望なウマ娘も受け入れた。トレセン学園やシンボリ家、ＵＲＡの佐岳（さたけ）メイとともに凱旋門賞（がいせんもん）制覇のプロジェクトを立ち上げ進めるなど、日々忙しくしているうちにあっという間に時が経った。

孫も生まれるような歳になった頃、風の便りでゴールドシップの名を授かったウマ娘が生まれたと知った。嬉しさのあまり小躍（こおど）りしたくなった一方、数十年もの時で隔てられてしまったことに寂しさを覚えた。彼女が三歳くらいの頃、彼女の家にこっそり見に行ったら、あまりにも大人しかったので別人かと思ってしまったが、端々に面影があった。

「そうか……ようやく貴様が生きる時代にたどり着けたんだな……」

数年のうちに孫娘が立て続けに生まれ、その中にはかつてゴールドシップが名前を口にした『メジロマックイーン』の名を授かったウマ娘がいた。彼女があのゴールドシップとともに仲良く学ぶ日が来るのだろうか。

それからさらに十数年経った二〇二〇年十二月のある日、札幌での講演を終えて帰宅したところ、マックイーンから一本の電話が入っていたことを知らされた。

「大奥様、マックイーン様より言付けを預かっております」

「どのような用件でしょう？」
「はい。マックイーン様の御学友が大奥様に面会したいと」
もしや、と思った。
「お名前は、ゴールドシップ様と」
「――わかりました。最も早くて来週の週末、それ以降はいつでもよい、と返信を差し上げてください」
「承りました」
執事長が退出した後、年甲斐（としがい）もなく部屋の中でスキップをしてしまい、さらに鼻歌も唄った。それくらい嬉しかった。こちらに連絡を寄越したということは、間違いなくあの時に別れた彼女、もしかしたらその直後の彼女かもしれない。人生の中でしばらくぶりに先が待ち遠しい十日間となった。

当日、自分では落ち着き払っているつもりだったが、家の古株にはすべてお見通しであったようで、メイド長からたびたび止められた。
「大奥様。マックイーン様と久し振りのご対面ゆえとは存じますが、気もそぞろであるよ

うに見受けられます。深呼吸を」
「失礼しました。我ながら少し浮ついてしまっているようです」
午後、ついにマックイーン、そしてゴールドシップとの対面が実現した。本当は早々にゴールドシップと二人きりで話をしたかったが、マックイーンをいきなり追い払うわけにはいかない。孫娘を内心ぞんざいに扱うのは申し訳なかったが、久方ぶりの初恋の相手との再会ということで許して欲しい。
「おばあさま、お久しぶりでございます」
「マックイーン、案内ありがとう。ゴールドシップさん、ようこそお越しくださいました」
「おっすばっちゃア痛あっ！」
気さくな挨拶をしようとしたゴールドシップが急に叫んで悶絶した。隣のマックイーンは澄ました表情を崩していなかったが、私は見逃さなかった。あれほどまでに高速な制裁を繰り出せる者はそうそういない。ここまで威力があるならば、勢いで五十年前の世界に送ってしまっても不思議ではない気がした。
二人はともにデビューに向けてトレーニングを積んでいる。間もなくゴールドシップが

メイクデビュー戦に出走するとのことだった。マックイーンもかつて私の前で宣言したように、ステイヤーとなるための力をつけているとのことだった。彼女ならば目指すもの、天皇賞の盾を手にすることができるだろう。

二人と話しているこの時間はとても楽しく、有意義なものだった。しかし、私にはすべきことがあとひとつ残っている。そしてそちらの方が今日の本題であるはずだった。

マックイーンを外に出すために一旦話を終わらせる形を取り、部屋を出ようとするゴールドシップに声を掛けた。

「ゴールドシップさん、ちょっと」

ようやく、きちんと呼びかけることができた。

「ん？　どうしたばっちゃん？」

それに対するゴールドシップの反応は淡泊なようにも感じられ、ちょっと不満を覚えた。貴様は再会できて嬉しくないのか。やはり似た歳ではなく五十も年をとった婆さんとの再会は嬉しくないか……。

そしてふと気づいた。もしかしたら、彼女は私があの時一緒だったウマ娘と同一人物だ

という確信が持てていないのかもしれない。ならば、こうしてみるか。

「――ぞんざいな口調は昔から全く変わらんな。昔と同じ見た目で貴様がいるのは不思議な気分だが、確かにあの時言った通りのタイムトラベルだったか」

効果は覿面だった。ゴールドシップの顔が一瞬にして驚きの表情に染まった。この口調で話すことも久しく無かったため、だいぶ口が回りにくくなっていた。

「口調を昔やんちゃだった頃のに戻してみたぞ。……久しいな、ゴールドシップ。息災で何より」

「アサマ姉さん……」

久し振りの抱擁。彼女にとってはごくわずかな期間と思われるが、私にとっては五十年ぶりのことだった。

「やっと会えたな……長かったぞ」

マックイーンが同席していた先ほどはかなり物理的距離があったので、今度は彼女のすぐ隣に座った。一瞬で距離を詰めたかったが身体が追いつかず、年相応のややゆっくりした動作しかできなかったのはちょっと悔しかった。五十年前に見た姿と全く変わらない彼

女に比べれば、やはり身体面では体力や瞬発力の低下は否めない。
「アタシにとっては姉さんがたった一週間でいきなりばーちゃんになって調子が狂うな」
「私にしてみれば、五十年前に出会った相手がその姿のまま目の前に現れているから、まるで貴様が神隠しに遭っていたんじゃないかと思ったくらいだ」
「神隠しに負けず劣らず変な事態だったな」
結局のところ、なぜ彼女が私が学園生徒だった五十年前にタイムスリップしてきたのかは分からないままだった。ただ、その不思議な現象のお陰で、私の人生はとても彩りのあるものになったのだと思う。期間にしてみればわずか一週間ほどだったが、それほどに彼女の存在は大きかった。それこそ、本気で好きになってしまったくらいには。
「しかしまあ、あの後結局トレーナーと結婚したのか？」
「そうだな。当時は堅苦しい『教官』という肩書だったが。……貴様と別れてからしばらく引きこもって、休み明けに再会して貴様のことを喋って聞かせて、その流れで交際を申し込んだ」
「姉さんからプロポーズかー、さすがだ」
「結婚したのはそこから三年ほど先だったが」

「ずいぶんかかったな」
「私の力がある限り走りたいという願いを叶えてくれたんだ。結婚をするのに丁度よい年齢まで待つという理由が大半だったが」
その夫は今日も先頭に立って、まだ小学生のウマ娘の生徒達に基礎トレーニングをつけている。ゴールドシップがタイムスリップしてこなくても、おそらく彼とは結婚したに違いなかった。しかし、その時期を早め、さらにその先に私と夫がともにウマ娘のトレーナーをするきっかけをくれたのは、彼女があってこそだった。
「なるほどな。それから何十年、ここまで家を大きくしたんだから大したもんだ」
「いろいろ頑張ったんだぞ？　頑張っていたらこうして婆さんになってしまったが、幸い生きて貴様のいる時代に辿り着けた。……長生きはなかなか難しいものだからな」
「そっか……」

こうして彼女を前にしていると、五十年前のあの感情が今でもちりちりと燻るように戻ってきているのを感じないわけではない。しかしそれはもう遠い昔の話、今の私には夫も、子どもたちも、孫たちも大勢いる。何の因果か孫娘達も彼女に懐いているし、聞くと

ころによればそのうちドーベルの方には彼女から声を掛けに行ったらしいではないか。孫娘達の恋路を元恋人が邪魔をするのも忍びない。余計なお世話だと思われそうだが、多少は婆様らしく助け舟を出してやるか。……孫娘達への助け舟と言うより、目の前のアホウの尻をひっぱたくのが主な理由だが。

「しかし貴様は孫娘によほど愛されていると見える。先ほどのマックイーンもそうだが、ドーベルとも親しいとSPから定期報告が上がっているぞ？」

「そこまで筒抜けかよ……」

「そうだ。いかなる経緯で特に縁もなさそうだったドーベルに愛を囁（ささや）きに行ったかは知らぬが――」

ここでふと思いついた。祖母たるものとして、孫の一方に肩入れするなどあってはならない。ともに手を貸さずに見守るという選択肢を取らなかった以上、せっかくならば驚くような発破をかけたくなった。

「――両方とも娶（めと）る覚悟はあるか？」

視線を横にやって彼女の表情を見て、成功を確信した。会心の一撃だった。そのようなことを言われると微塵（みじん）も思っていなかった彼女はしばらく固まり、間抜けな声をもら

した。

「へ？　二人？」

「いかにも。マックイーンとドーベル、両方ともだ。二人からの好意に気付いていない朴念仁ならば、ここを生きて出すことはできないが……どうだ？」

もちろん、生きて出さない方法など特にあるわけではなく、単なる言葉遊びだった。さすがの彼女とて、両方の好意に気づいていないほどアホウなわけがあるまいと、一パーセントくらいは思っていたが……。

「……マックイーンの方は全く気づいていなかった。ベルちゃんの方はアタシからの片思いだとばかり思ってた」

やはりダメだった。始めから分かっていたことで、だからこそこうして尻を叩いたわけだが。

「仕方のない奴め。このままだとすれ違いしか起きないと見込んだから、私の方から貴様に『情報提供』をした。良い報告が聞けることを期待しているが、究極、この二人を選ばずともよい。貴様が心から共にいたい者を伴侶として選べ。できればマックイーンかドーベルだと私にとっても嬉しいが」

「……いろいろ考えてみるさ」

最後に彼女に肘打ちを一発入れて、それから向かい合うように立ち、瞑目した。かつてほぼ同い年だった『メジロアサマ』は一旦ここで封印し、今一度『大奥様』、『メジロ家のおばあさま』に戻らなければ。

「さて、マックイーンを待たせ過ぎてはいけませんし。そろそろお開きにしましょうか」

「だな。元気でな、当主サマ」

私が元のモードに戻ったのを正しく理解した彼女は、呼び方もそちらの方に戻した。

「また会いましょう」

扉を出る彼女が背中越しに手を振った。彼女を含めて誰も見ることはないけれど、私も小さく手を振った。

終章　五十年の彼方

年が明けて二〇二一年の一月、私は久し振りに東京に来た。若い頃は夜行列車と連絡船の乗り継ぎで往復した道のりも、今や飛行機を使うことがほとんどとなった。特急列車と新幹線の乗り継ぎという道もあるが、さすがに年を取ってしまうと長時間の移動は疲れやすい。

今回の東京旅行は純粋なプライベート、いわゆる『お忍び』の旅で、本邸や東京の各居所にいる執事・メイドには行動予定を伝えていたが、ＵＲＡ関係から諸々手配してもらっているので世話などは不要、さらに、たとえ一族の者から何か聞かれても訪問を秘密にするよう要請していた。うっかり知られようものなら空港にさえ出迎えが来てしまって、本来の目的を果たせなくなるからだった。

羽田空港では、長年ともに仕事をしてきている佐岳メイの出迎えを受けた。
「やあ婆様、元気そうで何より」
「お前に婆様と言われるとなんだか腹が立つなミニマム不老不死仙人」
「キレッキレの返答、さすがアサマさんだ」
お互いに笑い、車に乗ってトレセン学園へ向かった。

「さて、一応聞いときたいけど、なんでお忍びで学園訪問しようとしているんだい？」
「まあ、ちょっと突撃訪問したい人物がいる」
「へえ」
なにか察するものがあったのか、佐岳はそれ以上突っ込んで聞いてこなかった。その代わり、昔からの通り職員ではなく子ども、あるいは子ども扱いされなくてもトレーナーにさんざん間違われることへの不満や、最近は『トレーナー』と呼ばれてしまうことで、ウマ娘のではなく別の分野のトレーナーに間違われることも増えたという話題を延々と聞かされた。トレーナー違いの間違われ方は十中八九その格好のせいだと思うが、何も言わなかった。

走ること一時間ほどでトレセン学園に到着した。学園を退職して以来ここまで直接足を運ぶことはまれで、十数年ぶりのことだった。若干の懐かしさと、さらに強化・新装されつつある学園の光景の新鮮さ、そして過去の思い出がさらに過去になりつつあることへの寂しさがない交ぜになった。

門をくぐり、三女神像と噴水がある広場に歩を進めた。

寒空の下、その傍らに四人目の女神のようなウマ娘が佇(たたず)んでいた。噴水の縁に腰掛けた姿はこの世のものでないようで、どこか別の世界から迷い込んだかのような存在感を示していた。私は思わず目を奪われた。これほどまでに神々しい存在は未だかつて見たことが――いや、この場所では五十年ぶりに見た。

しばらく呆けたように眺めていたが、思い出したかのように吹きつけてきた北風に意識を引き戻された。あの時は私が通り過ぎようとしたところで向こうから飛びかかられたが、今回は違うアプローチをとることにした。

未だこちらに気がつかない彼女に大きく近づき、直々のお墨付きの孫娘の声真似をして耳元で囁(ささや)いた。

「ゴールドシップさん」
「……ん？　マックイー、ン!?」
彼女は私を見るなり激しく取り乱した。
「マックちゃんがいきなりばーちゃんに！　……いや、マックイーンじゃ、ない？」
このようなところまで五十年前を再現しなくてもよかろうに。先月会ったばかりだというのに、なぜ私だと気がつかないのか。おそらくここに来ることを全く想定していないせいではあろうが。せっかくなので、私も少々再現しようと思った。
「人違いだな。私の名ではない」
もっとも、五十年前の冷酷な声音ではなく、もっと親しみを込めた声にした。
「……え？　アサマ姉さん？」
「一月ぶりだな。……ここで会うのは五十年ぶりだが」
いい雰囲気になりそうだったのに、ここでこともあろうに目の前のアホウが空気をぶち壊しにした。
「アサマ姉さんがここにいる……え、もしかしてついに往生しちまったのか!?」
「死んではおらんわ！　何だいきなり失礼な奴だな貴様は」

「え、でもさっきマックイーンの声そのものがしたから、死んでてっきり声だけ若返ったからだと」

「よし貴様そこに直れ、五十年前のように吹き飛ばしてやろう」

「待ってくれ！　すまん！　アタシが間違ってた！　ステイ！　ステイ！」

いくらウマ娘としての膂力がいまだ残っているとは言え七十近い婆さん相手に、闘牛にでも相対するかのような恐怖の表情と必死な声で止めに掛かられるのは大いに不服だったが、彼女にとってはわずかに一か月前のトラウマだったに違いないので、渋々矛を収めた。

まだ人が少なめのカフェテリアに移動し、一息ついた。ゴールドシップが不満げにもらした。

「いやーびっくりした。お忍びで東京に来るなら先に言っといてくれよ」

「先に言ってしまったらお忍びにならんだろうが。こんなに早く、あの場所で貴様と会うのは想定外だった」

「偶然かよ……てっきりアタシが広場にいるのをメジロのＳＰから聞いてここに来たのか

と思ったぜ」
「今回は完全な単独行だ。執事やメイド、ＳＰに行動予定こそ伝えてはいるが、情報提供の要請はしていない。掛け値なしの偶然だ」
「姉さんが来ているのはマックイーン達は知ってるのか？」
「いいや。関係者には孫娘達には私の所在を一切知らせないよう厳命している。だからもしここに来たらそれは完全なる偶然ということだ」
「そっかー。でもなぜにここに？　ＹＯＵは何しに学園へ？」
「五十周年の記念で、当時を同じ場所で懐かしんでみようと思った。それだけだ。変なお膳立てなしですぐに叶ってしまったから、今年も幸先が良い」
「姉さんは豪運だな。宝くじは買ったか？」
「いいや。うっかり当たってしまったら運を使い果たしてしまうだろう？」
「それもそうだな」
今回の目的があっという間に達せられてしまったため、いきなり暇になってしまった。ならば、と元々遅めの予定だった計画を切り出してみた。
「ゴールドシップ、今日は暇か？」

「暇っちゃ暇だが……あ、おっちゃんと新春すごろく大会をやる予定があったな」
「おっちゃん？」
「チームトレーナーだよ。アタシとマックイーンとドーベルがまとめて世話になってる」
「孫娘達が折に触れて称賛するトレーナー殿のことか。ちょっと挨拶に行こう」
「待て待て待て待て！　いきなりメジロ家のボスが特攻したら、おっちゃん腹痛で入院しちまうぞ！」
「話を聞く限りそうヤワなタマとは思えんが……」
などと問答していると、横から声を掛けられた。
「俺は腹痛は起こさねえよ。……っと、失礼いたしました。トレーナーの白江と申します。マックイーンさんとドーベルさんを預からせていただいております」
ただの元気な無名の婆様のふりをしようと思ったら初手で封じられてしまった。ひとまず挨拶は返さねば。
「申し遅れました。メジロアサマと申します。このたびは完全な私用で、家族には秘密にしてこっそり学園の散歩にまかり越しました。マックイーンとドーベルが日頃より大変お世話になっております」

「いえいえ」
深く一礼し、少し考えて話を続けた。
「そうでした。トレーナーさんにお時間がありましたら、少々お茶でもいかがでしょうか？　ゴールドシップさんとの新春すごろく大会のお邪魔でなかったら、ですが」
「あっ、アサマ姉さんそれは！」
ゴールドシップが慌てたのでもしや、と思ってトレーナーさんの方を見ると、首を傾げていた。
「新春すごろく大会？　そんな計画はしてないぞ？　やりたいならいつでもセッティングはするが」
「おおう……連携の不足で重大な結果を招いたァ、あ、いや別にこれは姉さんの誘いを断る口実をでっち上げたんじゃなくて本当にやる予定にしてたんだよ！　おっちゃんに伝えてなかっただけで」
「人に伝える前の予定を決定事項にするなよ……」
ゴールドシップとトレーナーさんのやり取りがずいぶんと楽しそうで、私との話の時と負けず劣らずの愉快さなのは興味深かった。

「でしたら、その新春すごろく大会に参加させていただくのは可能でしょうか？」
「「へ？」」
呆気にとられた二人に対して笑顔で続けた。
「堅苦しくするつもりはございません。先ほどの話が少し聞こえたかもわかりませんが、ゴールドシップさんとは親しくしておりまして、くだけた言葉でざっくばらんな話もする仲でございます」
「なるほど……。ゴールドシップ、お前さんなんかすごいな」
「いや、まあな……」

チームトレーナー室への道すがら、ゴールドシップから尋ねられた。
「すごろく大会をやってた時にマックちゃんやベルちゃんが来たらどうするんだ？」
「そんなの『メジロ家の当主とそっくり度百パーセントの元気な謎の婆様』でシラを切るに決まってるだろう」
「いやいやいやいや、さすがに孫娘は騙せねえよ!?」
「いや、こういうのは勢いでやると案外バレないものだ」

「おっちゃん？？」
トレーナーさんのノリが大変良かった。マックイーンやドーベルから聞く話を総合すると、大変な名将であると窺えるものだった。
チームトレーナー室に来ると、入口の横に大きな札が掲げられ、その上から何やら紙が貼られていた。
『チーム名変更検討中』と、……『自重』？」
「なんだよおっちゃんまた名前変える気になったのかよ」
「本格的な活動にあたって流石に奇抜すぎるということになってな」
「メンバーが満場一致で決めた名前を反故にするのかー、ぶーぶー」
メンバーが満場一致、つまりこの奇抜なチーム名はマックイーンとドーベルも認めたということであり、孫娘達のネーミングセンスが少々心配になってしまった。……名前を変更するならよい名前になってほしいと思う。
すごろく大会の参加者は私、ゴールドシップ、トレーナーさん、そしてゴールドシップが部屋の前で勧誘して捕まえてきたハルウララさんとヒシミラクルさんだった。ハルウララさんはこちらを見るなり「はい！」と元気よく挙手をした。

「なんでしょう？」
「おばあちゃんのお名前は？」
「アサマと申します」
「アサマおばあちゃん！　よろしくね！」
その横でゴソゴソとこたつにもぐり込んだのはヒシミラクルさん。自分が同席する会合では参加者が皆動きも表情も固くなってしまうので、彼女のように大いにリラックスしている子は珍しく、こちらの方の心が癒やされた。
「いやあ、やっぱりこたつはいいですねえ。ところでアサマさん、なんだか雰囲気がマックイーンさんみたいですね。マックイーンさんをおばあちゃんにしたらこんな感じというか」
「あら、私にそっくりな方がいらっしゃるの？」
私の言葉に、ゴールドシップがあからさまに驚いて視線を寄越した。『自分の孫娘のことを知らないふりすんじゃねえ！』と読み取れた。うるさい。
「はい〜、中等部の子なんですけど、いつも美味しそうにご飯とかデザートとか食べてまして〜、ついついわたしものせられて食べすぎちゃって」

「あらあら……」
「マックイーンさんも時々半泣きでダイエットしてますけど、それで毎回体型を戻してるからすごいですよね～。デビューしたらすごい選手になるんじゃないかな～」
ヒシミラクルさんからの孫娘評を喜ぶべきか、悲しむべきか、少々迷うところではあるが、体調管理はトレーナーさんに一任しようと思う。

すごろくはゴールドシップお手製で、各マスにこれでもかと指令が書かれていた。
「えーっと、六進んで――げっ、誰だよ『冷蔵庫のアイス一箱全部食え』って指令書いたのは！」
「貴様だろうが」
ついうっかりゴールドシップ相手の素が出てしまい、ハルウララさんとヒシミラクルさんに対して取り繕おうとした。
「きさま？　ファインちゃんも使ってたねその呼び方！」
「アサマさん、意外とワイルドな言葉遣いですねえ～」
「ハルウララさん、私の言葉を真似してはいけませんよ、おほほ」

冷凍庫の中に用意してあったアイス一箱、六本入りのものをゴールドシップが一息に食べようとしていたところ、ヒシミラクルさんとハルウララさんが目を輝かせてそちらを見つめていたので、彼女達に二本ずつ譲ることを許した。

次に私がサイコロを振ると、出た目は三だった。

「なに……『一曲歌え！』と」

なんというお題を入れているんだと思いつつ、何の歌にするか思案した。

「どれにする？　大体のものは学園にある練習用カラオケ音源が用意できるぞ？」

ゴールドシップがスマートフォンを取り出して画面を見せた。簡単な操作であれほど大量にある音源を即座に用意できるのはまさに時代の賜物だった。

「そうだな……せっかくならこれにしてみるか」

「はいはい。さすがに『メジロ讃歌』は歌わねえか」

「あれは一人ではつまらん」

ゴールドシップがどこかから用意してきたマイクを持ち、孫娘達が練習しているのを聞いたことがある曲をかけた。トゥインクル・シリーズ創設五十周年を記念して作られた、

トゥインクル・シリーズの選手達が抱くレースへの思い、応援してくれるファンとの絆、夢を繋いでいくことを歌った楽曲――『We are DREAMERS!!』。

前奏のうちに喉を整え、歌詞の一言目を発した。

歌い終わった後、見回すと全員が口をあんぐりと開けていた。……自分では結構うまく歌えたつもりだったが、何かヘマをしてしまっただろうか。不安になっていると、ハルウララさんが立ち上がって叫んだ。

「アサマおばあちゃんすごーーーーーい!!　歌手さんなの？」

「ちょっと失礼な感想かもですけど、声がおばあちゃんらしくなくて若々しくてすごいな〜って。私ももっと練習したいなって思いましたよ〜」

「流石（さすが）です」

皆から口々に高評価を得たところで、ゴールドシップが近づいてきて私の手を取った。

「……アサマ姉さん、今から歌でてっぺん獲らね？」

「てっぺんを獲るとは何だ。もう人前では歌わんぞ」

「そこは美声歌い手 VTuber としてだな」

そう言っていると、扉がかすかに動くのが視界の端に映った。それに気づくのと同時に、ハルウララさんがそちらに向けて声を掛けた。
「あ！　マックイーンちゃんにドーベルちゃん！　おーい！」
まずい。孫娘達がそのまま逃げてくれないかと思ったが、外でドタバタ音がした後、二人ともそろりそろりとチームトレーナー室に入ってきた。
「……おばあさま？」
「……似ているとよく言われます」
マックイーンの問いに一か八か下手くそな返しをしたものの、ゴールドシップに秒でツッコミを入れられてしまった。
「いや姉さんそりゃ無理だろそんなシラの切り方あ痛っ！」
ゴールドシップをとりあえず処し、孫娘達に向き合った。
「……確かにおばあさま、ですよね……？」
自信なさげに尋ねるドーベルを見て観念した。仕方ない。
「……いつから見ていましたか？」
「その……カラオケを始める少し前から……」

「『メジロ讃歌』は一人ではつまらない、みたいなことを言ったあたりから……」
だいたい全部だった。普段は孫娘達の前では決して見せないぞんざいな口調も、全部。ここに来てすべてのイメージが崩れる危機に陥った。どう取り繕うか思案を巡らせたが、何も思いつかなかった。
お手上げ。

すごろく大会が初手で棚上げになり、孫娘達からの質問攻めに遭った。いつの間に東京に来ていたのか、なぜゴールドシップと妙に親しいのか、あの謎の口調は、歌のうまさは、などなど……。ゴールドシップとの関係は、マックイーンと一緒に面会した時のさらに前に少し助けてもらった恩があったということにした。口調はゴールドシップにつられた、とも。責任を押し付けてしまって悪いとは思うが、ちょっと許して欲しい。
「おばあさまがゴールドシップさんと親しくなっていたとは驚きましたわ」
「助けてもらった恩は忘れてはいけませんからね」
その『助けてもらった』は、孫娘達に語った嘘の経緯からはるか五十年も前のことだったが、当然伏せた。

「おばあさま、歌、上手かったんですね。一瞬マックイーンが歌ってるのかと思っちゃいました」

ドーベルが心なしか目を輝かせて感想をくれた。

「ありがとうございます。孫達が歌う歌は一通りカラオケで練習をしております」

横でゴールドシップが『いきなり丁寧な口調になった姉さんこえぇ。温度差で風邪をひく』とのたまったので隠れて背中を小突いた。後で改めて倒す。

メジロ家の新春パーティー余興の目玉にしたいから、私のくだけた語り口と歌の実力については再来週まで伏せておいてほしいとマックイーンとドーベルに頼み、トレーナーさんの許可を得て、指定の店でのスイーツ引換券をお年玉と口止め料を兼ねて渡した。

「姉さんによる孫娘達の買収だ！　これはワイロだ！」

「他に一族の者の目もなく孫に直接会うのだからお年玉を渡すのは当たり前だ」

ゴールドシップが囃し立てるので、さらに追加で意趣返しを企てた。

「さて、と。婆さんとして孫娘達にお節介を焼きましょうかね」

ゴールドシップにしか聞こえないようにつぶやいたその言葉に察するものがあったのか、彼女がこちらに手を伸ばして押し留めようとしてきた。少し回避して話を続けた。

「ゴールドシップさんが北海道巡りを豪勢にしたいと仰っていたので、せっかくならマックイーンとドーベルが案内したらどうかしら？」
「あら？　そうでしたの？」
「えーっと、まあ、いろいろ、そうだな」
「じゃあ、案内します。……いろいろお世話になってるし」
ゴールドシップが頬を若干赤くしつつもごもごと何やら呟いていたが特に深く聞かなかった。

「お邪魔しました～」
「また遊ぼうね！　アサマおばあちゃん」
「ごきげんよう」
「ありがとうございました」
四名の来訪者を送り出し、私、ゴールドシップ、トレーナーさんの三名だけになった。
「ふう。いろいろバレてどうなることかと思ったが、ひとまずケリが付いたな」
「アサマ姉さんお疲れ～」

「まったくだ」
「これからどうする？　メシがまだだったろ。姉さんとおっちゃんとアタシでどうだ？」
「あー悪い、何かたづなさんから臨時の招集がかかった。ちょっとそっちに顔を出してくるから、ゴールドシップとアサマさんで食べに行ってきてくれ」
　とのことで、ゴールドシップと私とで懐かしの喫茶店――彼女にとっては数か月ぶり、私にとってはおそらく二十年ぶり。先代のマスターが亡くなった頃に、私と夫も退職して北海道に帰ったので、なかなか来る機会がなかった。
「いらっしゃいませ」
「こんにちは。ご無沙汰しております」
「お久しぶりです。こちらへどうぞ」
　二代目のマスター、先代の息子さんとは言えすでに六十代だった。退職前に時折来ていたときのように、そしてゴールドシップにご馳走したときのようにコーヒーとオムライスを注文した。
「今日は前回と違ってオムライスを大量にお代わりしてもいいぞ。十分奢(おご)れるだけの用意はしてきた」

「じゃあ遠慮して二回まで」
「遠慮か。フフッ」
前回は本当に遠慮かと思う頼みっぷりに聞こえたが、今は本当に遠慮に見える。支払いの面もそうだが、前回のときももっと食べたいのを我慢していたことが分かったからだった。
先代マスターの味を受け継ぎ、さらに洗練させたオムライスは大変美味だった。

コーヒーを味わいつつ、ふと思ったことを口にした。
「ゴールドシップ。貴様とこうして楽しく話せるのは、後何回くらいだろうな」
「姉さん、いきなりしけたこと言うなあ」
「まあ、貴様と初めて会ってから、私の方だけ五十も年を取ってしまったからな。たとえどんなに長生きを頑張ったところで、やはり貴様より先に寿命が来てしまう」
「そうだな……」
「とはいえ、人生何があるか分からん。分からないことを思い悩んでも仕方がない。私としては前も言った通り、孫娘達と貴様が一緒になれば嬉しいが、それは貴様の自由意志で

選択すべきことだ」

「……ああ」

「なあに、そう簡単にはくたばらんさ。『げっ、あのババアまだ生きてやがる！』と貴様に何回でも言わせるくらいには生きようと思う」

「何度でも言えるよう練習しとくぜ、アサマ姉さん」

初恋の相手とのひとときはいつでも、どれだけ年が離れてもいいものだ。当主の役を引退したらもう少し自由に出歩けると思うので、それまでに体力を失わないよう気をつけようと誓った。

最後、ゴールドシップと歩いて学園に戻ったところで、学園に通うメジロの一族が勢揃いして待ち構えていたのには仰天してしまった。誰から洩れたか、近くにいたアルダンに尋ねたところ、ハルウララさんが私が名乗った名前の一部『アサマ』と私の容貌を話してしまったらしい。口止め料を渡すべきだったかと考えたが、彼女なら『アサマおばあちゃんからお年玉もらったよ！　くちどめりょう、だって！』と楽しそうに話してしまうことが想像できた。

孫娘達には手短に挨拶をして、佐岳を呼んで車でそそくさと学園を後にした。今夜はホテルに泊まり、明日は北海道に帰る。仕事が少々溜まっているだろうし、再来週のパーティーの段取り指示が必要だった。大部分は家の者が手配してくれるが、招待状の送付先は私が決定し、直筆でサインを入れる必要がある。

今回は招待者リストの中にゴールドシップの名前を加えることに決めた。来てくれるかはわからないが、きっと来てくれそうな気がした。今から楽しみだ。

（『五十年の彼方』　完）

あとがき

お久しぶりです。麦（穀物P）です。

当作品『五十年の彼方』は、pixiv に掲載した単発の短編『タイムスリップ』という、ゴールドシップが突然五十年前の世界にタイムスリップしてしまう話を、五十年前の世界で出会ったヒロインの視点から書いたものとなります。pixiv で連載したものを大幅加筆しました。連載時は『彼方、浅間の嶺』という凝った題をつけてみたものの、作品を適切に表す題ではないと考えたため、シンプルに『五十年の彼方』と改題しました。

そのヒロインは、ウマ娘作中では『メジロ家のおばあさま』として描かれているウマ娘の若かりし頃としました。おばあさまが誰であるかは諸説ありますが、呼び方の響きか

ら、有力な説のひとつであるメジロアサマさんであると設定して話を書きました。史実血統において、メジロアサマさんはメジロマックイーンさんの二代前、父父にあたります。

公式作中において、おばあさまは落ち着いた語り口の人物として描かれているのみですので、学園の生徒であったであろう時期の描写は皆無です。性格を設定するにあたってはメジロマックイーンさんを参考にしつつ、pixiv で見たメジロ家のおばあさまの若かりし頃を想像して描いたファンアートから構想した、「一見物静かで厳格そうに見えるが、内実は一途な乙女」という性格にしました。もちろんこれは独自設定、妄想の産物です。

この作品も発想から執筆、pixiv 掲載、完結までの期間が短かった作品に入ります。一気呵成に書き上げた長めの話としては、未だに初期の『Trial #143』を超える執筆速度が出たものはありませんが、あれは究極の外れ値なのでカウント除外としたいと思います。

引き続き『ご注文はうさぎですか？』二次創作小説との並行執筆を進めていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

麦（穀物P）

五十年の彼方

著　者：麦（穀物Ｐ）
発行元：麦之穂
サイト：https://muginoho.ehoh.net/
連絡先：circle_muginoho@aotake91.net
発行日：二〇二五年（令和七年）　一月十九日
印刷所：ちょ古っ都製本工房（https://www.chokotto.jp/）